

タイトル	札幌の偉人・上島正に関する一考察：なぜ，上諏訪（長野県）の武家の嫡男が札幌を開拓する企業家となったのか
著者	黒田，重雄；KURODA, Shigeo
引用	開発論集(88)：125-166
発行日	2011-09-01

札幌の偉人・上島 正に関する一考察

——なぜ、上諏訪（長野県）の武家の嫡男が札幌を開拓する企業家となったのか——

黒 田 重 雄*

目 次

はじめに（上島 正は札幌の偉人の一人である）

1. 生まれてから17歳で江戸に出るまで—— どのような教育を受けていたのか ——

1-1. どの生まれか（どのような藩に所属していたのか）

1-2. どのような教育を受けていたのか

2. 江戸に出てから札幌に来るまで—— 何をしていたか ——

2-1. 江戸の逗留先から半年でなぜ町屋に奉公に出たのか

2-2. なぜ行商人や測量士になったのか

3. 札幌に来てから—— どのようなことを成したのか ——

3-1. なぜ札幌に来て米作りをすることになったのか

3-2. なぜ上諏訪から大勢の人々を連れてきたのか

3-3. 札幌で成した顕著な業績は何であったか

3-4. 自己の人生をどのように振り返っているか

おわりに（上島 正は札幌の企業家第一号とも言える人物であった）

注と参考文献

はじめに（上島 正は札幌の偉人の一人である）

本論考は、屯田兵として来たわけでもなく、開発会社の一員として来たわけでもなく、単独で札幌にやって来て、開拓に携り成功した、一企業人の足跡について考察したものである。

(1) 上島正は諏訪郡湖南村（長野県）の出身

上島正（かみじま ただし：以下、上島）という人物は、札幌歴史資料館の「札幌の歴史を築いた先人達」として黒田清隆や新渡戸稲造などと一緒に名前の挙がっている一人である⁽¹⁾。

そこでは、上島が精魂込めた努力により完成した花畑「東臯園」や信濃國一の宮諏訪大社のご分霊を奉祭した札幌諏訪神社を最初に建立した人として紹介されている。

また、北海道開拓に携わった人々のうち長野県出身者は割合に少なかったが、その中で、明治期、特に顕著なる移住者として北海道庁の広報に上島の名前が紹介されている⁽²⁾。

上島に関する部分を抜粋すると（原文通り）、

*（くろだ しげお）北海学園大学開発研究所特別研究員（北大名誉教授）

札幌附近の諏訪郡民 明治十年諏訪郡の民**上島正**なるもの札幌に移住し開墾に着手す同十四五年の交同郡の民数十戸団結して移住せしか率先者の詐偽に罹り遂に団結を解き各自民札幌附近に於て土地を購ひて土着し又其の内の一部は白石村字厚別に於て未開地を出願し水田を開き此処に新部落を成せり同地に信濃開墾地の名あるは之か為なり、要するに此移住民は着実業に従ひ概ね成功して現今屈指の農家となれり今其主なるものを左に挙げん

上島 正 札幌区に於て著名なる花園業者なり其園を東阜園と称し牡丹、芍薬、花菖蒲、ペコニヤ、萩其他和洋花卉数十種を栽植又種苗を販買せり

一方、上島は、南画をよくし、札幌に来てからも相当数の画を描き残している⁽³⁾。上島の描く画は、北海道開拓の様子を伝えるものとしてよく引用される。下記の2枚は、開拓時代の開墾の様子を描いたものである（北海道開拓記念館蔵）。



ところで、筆者が、この人物の存在を知ったのは、筆者が所属する厚別中央歴史の会で札幌市厚別区の開拓の経緯を調べていたときである。すなわち、厚別地域の開拓は、明治16年に8名の開拓者によって厚別中央地区で始まったとされている。われわれのテーマの一つは、この

8名がどのような経緯でこの地区を開拓することになったのか、であった。

調べるうち、8名を連れてきたのが上島であるということが分かってきたのである⁽⁴⁾。

また、彼は札幌圏域の開拓者も多数つれてきていることも明らかとなってきた。

一方で、上島は、「東臯園」や「札幌諏訪神社」のみならず、多くの業績を残していることも分かってきた。

結果的に、筆者としては、その業績の最たるものは、二つであると考えている。

- (1) 札幌で、単独で米作りに成功した（札幌では最初であるかもしれない）。
- (2) 大勢の人を故郷・信州信濃の上諏訪（現在の諏訪市）から連れてきた（各人はそれぞれ札幌圏内の開拓で成功を収めている）。

とにかく、（後にみるように）上島は、江戸期に上諏訪にあった譜代藩の重臣の嫡男として生まれているが、若くして武士を捨て、町屋に奉公し、行商人になったり、測量士になったりした後、単独で札幌に入植して一代を築いたばかりか、故郷からも大勢の開拓者たちを札幌圏へ呼び込んで成功させ、最終的に、「札幌の歴史を築いた先人達」の一員と成った人物なのである。

この意外とも見える遍歴の過程を辿った上島とはどういう人物であったか。

結論を先取りすると、筆者は、上島は、単独の民間人開拓者であり、かつまた、おそらく札幌における最初の日本人企業者だった、と考えている。その考えに立ち至った論拠を明らかにしてみたいというのが本小論の目的である。

そのため、彼は、「どこの生まれで、どういう教育を受けたか」、「時代状況はどうだったのか」、「なぜ、大勢の人を連れてくることになったのか」、「どういう考えの持ち主であったか」等々についての検討が必要となる。

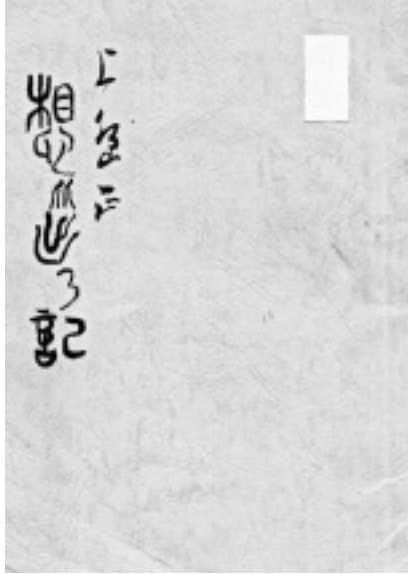
(2) 上島の書き残した「想い出の記」

本論に入る前に、上島の書き残した読み物を紹介しておく必要がある。筆者は、札幌の開拓にまつわる事柄を考察するに際しての最も基本的な文献として採用しているからである。

上島は、63歳の時【明治33年（1900）】に『想い出の記』と題する日記風の読み物を現している（全38頁）⁽⁵⁾。

この読み物は日記調であるが、上島の自伝と言っても過言ではないものになっている。しかも、その筋立ては象牙生という人が上島との問答形式をとりながら進行するという体裁になっている。このようなストーリーにしていること自体、ある意味、風流人としての面目躍如といったものである。

この冊子（日記）を筆者も読んで理解しようとするが、字体はいわゆる御家流（おいえりゅう）の草書体（例えば、『広辞苑』によれば、「和様書道一派である青蓮院（しょうれんいん）流は、江戸時代にいたって大衆化した。江戸時代の公文書はこの字体に限られた」）の形をとっており、読み解きにくい部分が多い。しかし、「厚別中央歴史の会会員・根岸徹の校訂」文を参



「想いの記」表紙



明治 33 年 10 月 21 日付の第 1 頁

照しながら読み進むうち、上島の生涯にまつわるさまざまな事柄が眼前に浮かんでくると同時に、何故に厚別のみならず、多くの札幌圏の開拓（者）と密な関係にあったのかも、（薄々ではあるが）理解できたという感想をもつにいたっている。

最終的にわれわれが知りたいのは、上島の人生にとって、何が大切だったのか、彼は何に喜び、何を悲しみ、何を目的に生きたのだろうか、である。

そして、殿様や政治権力者の傘の下にでもなく、著名な文化人として知られているわけでもなく、武家の生まれでありながらその身分を捨て、いわば市井の一人になって生きてきたような人が、何故、札幌の開拓に大きな関連をもつにいたったのか、を探りたいということである。

彼の『想いの記』（以下、日記）に依拠しながら、関連文献により解明の糸口を掴んでみることにする。（なお、以下の「想いの記」の引用では、根岸徹校訂文を筆者が若干読みやすく改めた箇所がある。）

1. 生まれてから 17 歳で江戸に出るまで

—— どういう教育を受けていたのか ——

1-1. どの生まれか（どのような藩に所属していたのか）

(1) 信州信濃とはどういうところか

上島は、長野県の上諏訪村の生まれとなっている。かつての上諏訪村は明治 24 年に町名になり、昭和 16 年に諏訪市に併合され、現在は、駅名「上諏訪駅」にその名を留めるのみである。

ところで、長野県は、かつて信州信濃とも呼ばれ、アルプスの山々に囲まれた風光明媚な土



現在の上諏訪駅ホーム（筆者撮影）



諏訪市内（山の上の方に旧高島城址があり、すぐ手前に諏訪湖）
（筆者撮影）



出所：加藤秀俊『空間の社会学』（参考文献(6)）より。

地柄である。県庁所在地の長野市には「善光寺」があり、南に下がると日本4大名城の一つ「松本城」もある。

さらに下って東南方向に「諏訪湖」がある。糸魚川静岡構造線（フォッサマグナ）の断層運動によって、地殻が引き裂かれて生じた構造湖（断層湖）である⁽⁶⁾。

「上諏訪」は、江戸時代には「高島藩」の城下町であった。

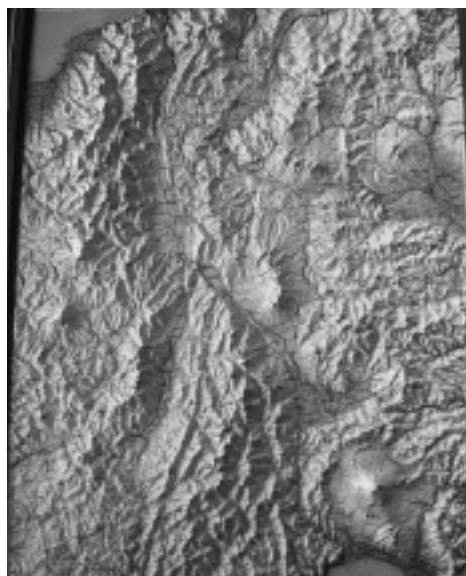
天正10年（1582年）に武田氏が滅び、（本能寺の変があって、信長が倒れると）諏訪頼忠が、諏訪に復帰する。

慶長6年（1601年）諏訪頼水が高島藩初代藩主となる。高島藩の藩格（地位）は譜代である。

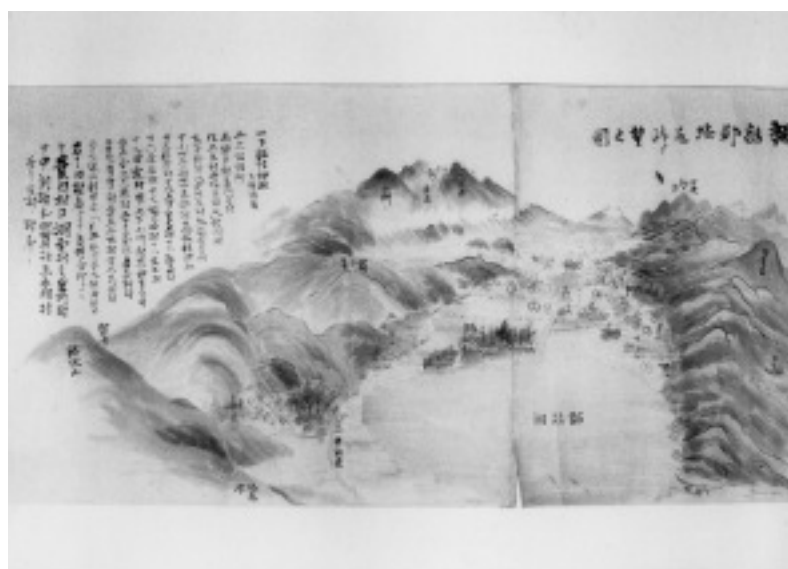
上島は、諏訪郡一帯を描いている。

この絵の右手に湖南村がある。上部には宮川村（現茅野市）も見える。諏訪湖の中に見えるのは高島城である⁽⁷⁾。

当時は湖の中にあったが、今は埋め立てにより、城も建て直されて陸上にある。現在の高島城は、本来は山の上にあったが（高島城址あり）、武田信玄に反旗を翻したとき下へ降ろされたとかで、こじんまりした城になっている。しかし、昭和期に建て替えたとかミニチュアセット



松本のホテル・東急インにあったジオラマ・真ん中に諏訪盆地（ほとんど諏訪湖のみ）があって、その右下に甲府盆地（その下富士山）、左上部に松本盆地があるが、それ以外はほとんど山岳地帯であることが分かる。



の面影がある。

明治元年には、諏訪忠礼が第10代高島藩主となって、最終的に彼が約270年続いた高島藩を閉じている。

現在の諏訪市は、長野県南信地方の市で、諏訪湖に隣接する工業都市で、諏訪湖や上諏訪温泉、諏訪大社の下社・上社、霧ヶ峰高原を抱える観光都市でもある。

セイコーエプソンの本社及び基幹部門、タケヤ味噌の竹屋の本社がある。第2次世界大戦後、時計、カメラ、レンズなどの生産が増え、山と湖のある風土と相まって、東洋のスイスと称されたことでも有名である。地酒メーカーも沢山ある。

また、ことのほか神社仏閣の多いところである。特に、「諏訪大社」は全国的に有名である。

まず、「諏訪大社下社」には「春宮」と「秋宮」があり、秋宮は相当立派に見える。この神は「木」に宿っている。御柱祭り用の（今までの）御柱が立っていた。

また、「諏訪大社上社」には、「本宮」と「前宮」がある。また、上社には天然記念物「長野県天然記念物・諏訪大社上社社家」もある。この神は「山」そのものに宿っていることになっている。下社、上社とも神は同じだが、神は回って歩くのであるという。そのときどきで宿主を変えているらしい。



山から降ろされた現在の高島城（パンフレットより）



現在の諏訪湖畔(写真の左手に上諏訪駅がある, 写真上部の山裾に広がる村落が湖南村)

出所：諏訪市企画部企画調整課「諏訪市勢要覧 2010」



諏訪市内から諏訪湖を挟んで岡谷市方向を望む（筆者撮影）



諏訪大社（下社 筆者撮影）



諏訪大社（上社 筆者撮影）

両社の御柱は、7年ごとぐらいに取り替えるということで、その取替行事「御柱祭」はとにかく危険そうだが勇壮である。

諏訪地方と言えば、かつての「女工哀史」の「ああ、野麦峠」の舞台としても有名である。日本が開国した明治から大正にかけて、外貨を稼ぐ手だては、生糸であったが、諏訪地方には豊富な水もあり、製糸工場が集中していた。養蚕が日本を支えていた時代、その陰では10代、20代のうら若き製糸工女たちの悲惨な生活があったという話である。

そして、かつての上諏訪は、諏訪湖の東側にあって、四方を山に囲まれた「諏訪盆地」の中にある一村であった。



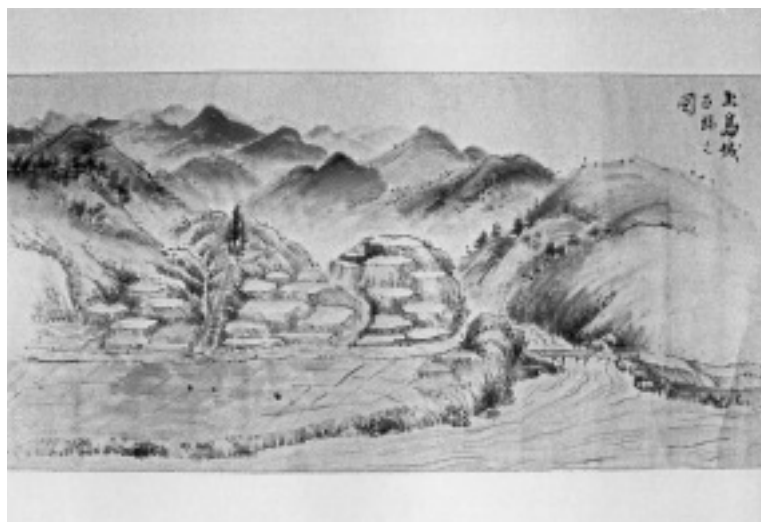
御柱祭（諏訪市観光ガイドより）

(2) 上島の生まれは諏訪郡湖南村

上島は、天保9年（1838）5月15日、上諏訪（長野県諏訪郡湖南村南真志野）に生れている。

上島の実家は、(上島の日記によると)上島家は古くは信濃国上伊那を領する上島城主であった。しかし、落城の後(いつかは不明)、諏訪家に随身し、家老主座となり、その子孫である上島刑部以降は代々普請奉行を勤めるとともに諏訪郡湖南村南真志野に住まうようになったという。上島の父幸右衛門も奉行の要職にあったと考えられる。上島は幼名が源吉で家督相続の折り、名前を正に改めたとある。

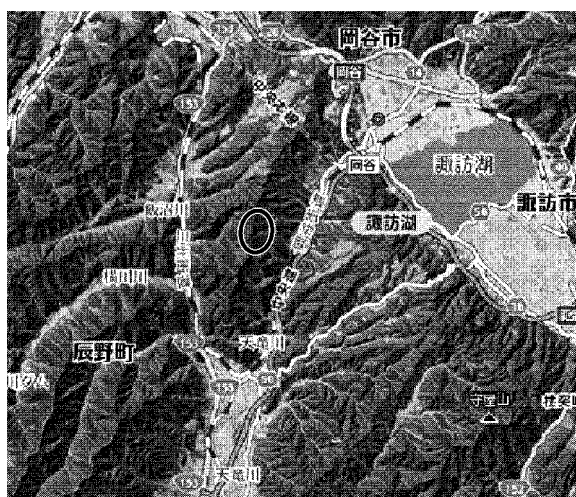
下図は、上島が、先祖の築城した「上島城」を描いた、とされるものである。



この描かれた絵より、長野県北伊那郡小野村の近くであろうと、辰野町役場を訪ねると、教育委員会教育次長・向山 光氏は、この辺りにあったであろうと地図上で指さすが、不明確であるとの返事であった。

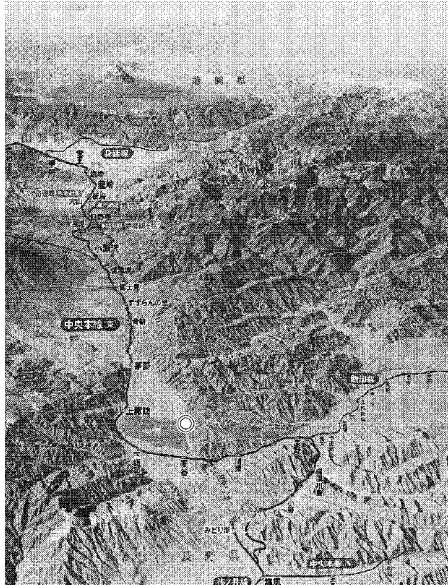
一方、現在の諏訪市における湖南村の位置は、次頁の図中の(○印)のところである。

また、上島は、湖南村南真志野の全景を描いている。当時は、山裾では桑畑が多く見られ、平地は水田であった。現在の諏訪市湖南(湖南村)も山と水田に囲まれた狭い地域であるなど、150年前とほとんど変わらない風景である。



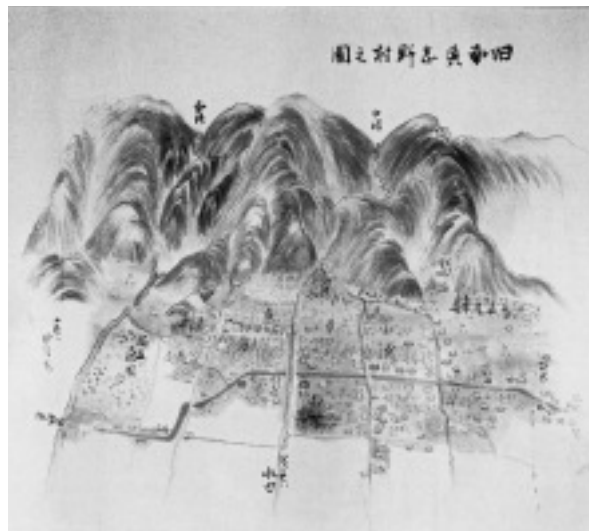
上島城は○辺りの深い山あいにはあったらしい。

出所：YAHOO! ジオシティーズ⁽⁸⁾：

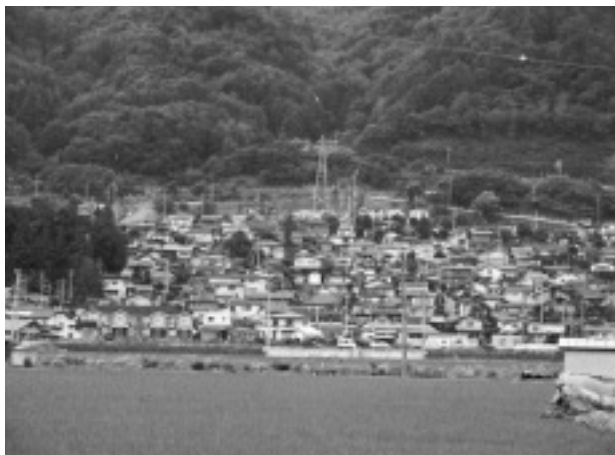


注) 図中の○印：上島の出身地・湖南村の位置
(諏訪湖側から富士山側を見る)。

出所：「週刊鉄道絶景の旅」編集部編(2010)『全国鉄道パノラマ地図帳』⁽⁹⁾。



上島の描いた南真志野村（湖南村）図



現在の湖南村一帯（家々の間に畑がある。手前は水田）
（厚別中央歴史の会会員・松山瑞穂氏撮影）



甲州街道と中山道の合流地点

このようなところから、どのようにして北海道までやってくるのでしょうか。

諏訪（下諏訪）には甲州街道と中山道との合流点があった。大きな宿場町を形成していた。つまり、ここからはそのどちらかを通して江戸（東京）へ向かうことができた。

しかし、いかに昔の人は健脚であったとは言え、一口に上諏訪から札幌（北海道）まで道のりはきわめて厳しいものだったに相違ない。まず、上諏訪から江戸（東京）へ出る場合、甲州街道か中山道かを利用したと考えられるが、そのどちらも 200 km 以上であり、途中名だたる険しい峠を越えねばならない。

上島も方向からいっておそらく甲州街道を上ったと考えられるが、こちらは全長約 210 km で、街道には、大旨原型を留めた「小仏峠」、「笹子峠」の難所（今日でも）控えていた。（中山道には「碓氷峠」などがある）

また、北海道へは東京（横浜）から難破の可能性のある船を使って 2～3 日掛けて渡ることになる。こうして、全体として最低でも 2 週間は必要な旅であったと考えられる。

1-2. どういう教育を受けていたのか

(1) 書画を学んでいたのはなぜか

上島は、『想い出の記』に、

私は天性画が好きで号を友艸（そう）軒湖山とか虚舟と申しました。狂歌などを詠むときは花園の歙持と申しております。書画は9歳から17歳まで生之堂鏡湖先生に就いて学びました。

と書いている。

なぜ画を学ぶことになったのか。その理由としては、歴代の高島藩主の文芸（教養）に対する造詣の深さにあったことが考えられる。

諏訪市・諏訪市教育委員会編（1985）『第21回諏訪市文化祭・諏訪藩主展』によると⁽¹⁰⁾、3代藩主忠晴（ただはる）（明暦3年（1657年）封す）の項で、

忠恒（2代）の長子で母は永高院小喜多民といい京都の公卿の出である。高島藩政は初代二代の間にほとんどその基礎をかためた。新田も大部分できあがっていた。

いろいろの事例もととのった。三代忠晴としてはそれを整備すればよかった。寛文の法度はじめ慣例を明文化した法令をたくさん出した。宗門改・鉄砲改をはじめ、藩政の第一次改革ともいうべき地方知行の召しあげも円滑にすんで封建制は完成し、藩政には何の心配もないまでになり、3代目になってはじめて藩主が文芸に遊ぶ余裕ができた。忠晴は画才文才にめぐまれていた。画は水島ト也等狩野派の人に学び、西王母・孔子など人物画をよくした。



西王母の画—忠晴自筆—
（高国寺蔵）

漢文では紀廟の記や灘波紀行などが知られ、修史を志しては本朝武林小伝七巻、続本朝武林小伝三五巻をつくり、下諏訪に逍遙亭を営み、詩人集めてその詠を編したりもした。大納戸日帳は忠晴がはじめて藩主の身边を記録させたもので、それによると能楽にも興味をもち、みずからも

シテをつとめるほどの上達で、あわせて御預人忠輝のなぐさめにもしたようである。

3代目はその家の運命をきめるといわれるが、忠晴は、諏訪家の基礎をかため、みずからは好む道に遊ぶことができ、理想的な藩主であった。千野家老家の記録に、

乾隆院尊候御功業の儀は筆紙につくし難く、大家の御廟にして百載まつるべき君なり。

とあるように、よく三代としての責任を完うした藩主であった。

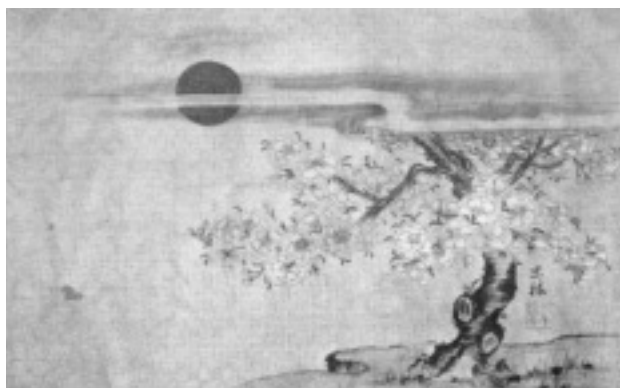
将軍の命により奥州平藩主内藤帯刀の女をめとり、これは諏訪家に俳趣味を移植する機縁になった。

また、4代藩主**忠虎**（ただとら）（元禄8年（1695年）封ず）については、彼の個人的な趣味は、俳諧であり、父の劣らぬ好学の藩主であり、深く学芸を愛し、誌・歌・画などを学び、特に俳諧は闇幽と号してその道も上手であったとしている。特に、母方の伯父平藩主内藤長概（風湖）が談林俳諧の長老であり、忠虎は江戸六本木にあったその家に入出入りすること多く、その影響を受けてこの道に入り、のちには芭蕉の門人服部嵐雪や榎本其角等について正風を学んだことが紹介されている。（この時期上諏訪に芭蕉の弟子曾良が出ている）⁽¹⁾。

5代藩主**忠林**（ただとき）（享保16年（1731）封ず）も、学問にはきわめて熱心で、荻生徂徠の流れをくみ、服部南郭について詩文を学び、江戸邸には清風楼、諏訪には八詠楼をつくり誌友を招くなどして、詩文の作はすこぶる多かった。

画も山水といい人物といい結構であり、趣味の大変に広い藩主で、これが藩士に影響し、一般の趣味を高める結果ともなった。

6代藩主**忠厚**（ただあつ）では、貨幣経済が進むにつれて、藩財政は困難となって、お家騒動まで起こっているが、7代藩主**忠肅**（ただかた）は俳名を「月閑亭」、8代藩主**忠恕**（ただみ



旭日桜花の画—忠林自筆—
（安間美子氏蔵）

ち)は俳号を「射山」と号していた。

藩主がこうであったから、藩士たちも文芸を嗜むようになったのではないか。彼らの子弟もそのような素養を積むことが求められたに相違ない。上島もその流れで書画を学んでいたと考えられる。

ところで、上諏訪は、江戸末期、全国有数の教育に熱心な地域であった。

諏訪地方の教育の基礎を築いた「高島小学校」に関して、明治5年の学制改革以前からの資料が満載されている『高島学校百年史』の「あらまし」には次のように書かれている⁽¹²⁾。

維新时期を迎え高島藩も時勢に対処すべく、皇道を本とする国学校をいち早く生み出し平民の入学を許可した。又、長善館は廃藩置県と共に高島県学校長善館となり大きく変革して存続の努力を続けたが、新時代の中でその封建的な体質は如何ともしがたく旧藩県と共に廃校の運命をたどっていった。しかし藩校の教授・学生達は、新しい時代における小学校の教員あるいは設立世話役となり、新体制出発の基礎固めに大きな役割をはたすことになった。

他方、寺子屋は何の強要もない自由意志に基づく私立の教育機関であり、入門者は身分・格式・性別を問わず全くの自由性普遍性のもとで教育が行なわれていたところに意味がある。上諏訪地区でも十軒以上の塾で五百余名の子ども達が通塾していた。他地区に比して女子の割合が多く士族の師匠の多いのが特色であった。その教育は個別指導による読み書きの実用教育であり、師弟の間の人間関係の深さは瞠目させられるものがあつた。近代学校発足時において寺子屋師匠達も教員への転身、学校世話役・学童への入学啓蒙等積極的な働きかけを行なっている。後、筑摩県の就学率が日本一になった原因の一つとしてこの寺子屋教育の庶民への浸透ぶりは無視できない重みをもっていたといえよう。

こうした上諏訪における寺小屋の隆盛については、「全国一の寺子屋」として杉浦幹雄が書いている⁽¹³⁾。

上諏訪は、これまで新田次郎、平林たえ子などの作家をはじめ多くの芸術家、学者を輩出しているが、数学のノーベル賞といわれるフィールズ賞受賞者の小平邦彦は、「江戸期に寺子屋に通ったらしい祖父」について回想している⁽¹⁴⁾。

明治元年に十一歳であった祖父は、子供の頃寺子屋にでも通って白文の素読で漢文を学んだのであろう。白文というのは訓点をほどこしてない漢文のことで、素読は意味を説明しないで音読させることをいう。「読書百遍意自ずから通ず」で、素読を繰り返していると意味は自然に分かったものらしい。

また、当時、上諏訪では、武士の子弟のみならず、農民や町人の子供も寺小屋や漢字塾（漢籍の素読）などで文芸や心学（石門心学：石田梅岩の説で、武士の俸禄も商人の利益も同じも

のとする考え方)などの素養の数々を身につけることができるようになっていた。

石門心学は、日本における「経営学」の嚆矢ともされている。先にも見たごとく商売のあり方から始まっている。日本では士農工商の身分発想が根強く、「商」の研究が遅れたが、17世紀後半の元禄時代には、読み書きそろばんのテキスト「商売往来」が広く読まれるようになった。元文4年(1739年)、石田梅岩が『都鄙問答』(とひもんどう)を刊行している⁽¹⁵⁾。

高島藩の重臣の嫡男であった上島の受けた教育も、歴代藩主が、漢文や俳句など文芸を奨励していたこともあり、おそらく、彼は藩校に通いながら、儒学など武士道を学びながらさまざまな素養を身に付けさせられていたのであろうし、また、ことのほか絵(南画)が好きで特別に師について勉強し、雅号を持ったりしている。

上島の思想的背景はどうだったか。当然、藩校などで儒学(朱子学)(仁、義、勇、礼、誠)の素養は積んでいたであろう。また、上諏訪の寺子屋や塾などで盛んに教えられていた「心学」の影響を受けていたと考えられる。

その証拠は、後に検討されるように、あっさり武士を棄て、町人になっていることである。士農工商の身分制度を無視した行動である。さらに行商人もやり、測量士にもなって、最後は開拓者となって米作をはじめ園芸農家となっている。職業の変更には何の術(てら)もない。

そこには「人に仕えないことの身軽さ」の心境ものぞいている。一方では、正直に生きることが前面にでている。新渡戸稲造の言う「武士道(Bushido, the Soul of Japan)」の「誠実(sincerity)」も生きていたかも知れない⁽¹⁶⁾。また、実践を重んじる陽明学も頭の中に入っていたかも知れない。

2. 江戸に出てから札幌に来るまで——何をしていたか——

2-1. 江戸の逗留先から半年でなぜ町屋に奉公に出たのか

*上島と明治維新について

日本近代史の代表的研究者である遠山茂樹の著書『明治維新』の最後に、

歴史的画期としての明治維新は、天保12(1841)年の幕政改革に始まり、明治10(1877)年の西南の役をもって終る、37年間の絶対主義形成の過程であると考え、ここに明治維新史の筆を置く。(了)

と結んでいる⁽¹⁷⁾。この遠山の明治維新の期間(37年間)と上島が生まれてから札幌へ来るまでの過程(40年間)を比較してみる。

奇しくも遠山茂樹の明治維新の期間と上島が札幌へ来るまでの期間が一致している。

因みに、絶対主義の完成物と見られる明治憲法(大日本帝國憲法)は、1889年(明治22年)2月に発布、1890年(明治23年)11月に施行されている。

明治維新（期間 37 年間）	上島 正（札幌へ来るまで 40 年間）
天保 12 年（1841） 幕政改革（水野忠邦） ↓ ペリー来航（1853） 安政の大獄（1858） ↓ 王政復古（慶応 3 年（明治元年）） （37 年間） ↓ 版籍奉還（明治 2 年） 廃藩置県（明治 4 年） ↓ 明治 10 年（1877） 西南の役	天保 9 年（1838） 高島藩の重臣の嫡男として生まれる ↓ 安政 2 年（1855）上島、江戸へ （直ちに町屋へ奉公にでる） 慶応元年（1865）行商人になる ↓ （高島藩廃藩） 明治 7 年（1874） 測量士になる（37 歳） ↓ 明治 10 年（1877） 上島、札幌へ（40 歳）

つまり、遠山によると、明治維新とは、幕末期から明治憲法が施行されるまでの大混乱期なのである。

人々にすれば、300 年の眠りから目を覚まし、今までとは打って変わった状況に置かれて、何の補償もなく、どうしていいかわからない、しかしまた、自分で何かをしなければ生きていけないと右往左往していた時期だということになる。

青年・上島もまさしくその渦中にいた。彼はどうしていたのか、またどうしたのか。結局、どうして札幌で開拓することになったのか。

* 高島藩と幕政改革について

徳川家康が天下をとってから、譜代の高島藩も全体として安穏な日々を送っていたといえる（ただ、6 代藩主忠厚（ただあつ）（宝暦 13 年（1763 年）に藩主となる）のとき、貨幣経済が進むにつれて、藩財政が困難となったことがあり、お家騒動に発展しているが表沙汰にはならなかったことがある）。

日記には、父の命により 17 歳で江戸へ出て、森備中守屋敷富木衛門七方へ逗留する。半年ぐらい経って急に武士家がいやなりそこを飛び出し、丸腰になって町屋に 10 年間奉公した、とある。

上島が江戸へ出る前後の状況を考えてみる。上島の江戸へ出た年は、安政 2 年（1855）であった。世の中は騒然としていたが、高島藩としては政治の前面にでていたところである。

9 代藩主の忠誠（ただまさ）が、幕閣の若年寄、老中にまでなったときと軌を一にしていたからである。

このころ、高島藩の石高は、3 万石（文久 3 年（1863）、幕府大目付調べ）の小藩であった⁽¹⁸⁾。江戸の藩の石高ランキングでは、185 藩中、外様大名前田利家の金沢藩の 120 万石を筆頭に、譜代大名諏訪頼忠（3 万石）は 125 位であった。

小藩主でも老中にまで上り詰めるとというのが混乱期の象徴といえるかもしれない（江戸期の幕閣には小藩主が就いていたという説もある）。

先に引用した、諏訪市・諏訪市教育委員会編の『第21回諏訪市文化祭・諏訪藩主展』には以下のように書かれている。

9代藩主忠誠（ただまさ）（1821-1898）は、8代藩主忠恕（ただみち）の長子、母は松平定信の女清昌院で、江戸木挽町の藩邸に生まれている。

天保11年（1840）20歳で藩主になり、万延元年（1860）40歳で若年寄に、元治元年（1864）44歳で老中にあげられ、外国御用を兼ね、浦賀で、また江戸の自邸で外国人と接渉するなど大いに働いたが、長州征伐のことで閣僚と議が合わず退官した（長州征伐には反対していたらしい）。

高島藩主が幕府の主要な地位についたことは空前のことであって、忠誠の人物のすぐれていた証左であるが、この就任が維新に当たって高島藩の立場をひどく難しいものにした。

すなわち、官軍からは佐幕派の頭目とにらまれ、またにらまれていると思ひ込み、一万石減封のうわさを信じて京都に特使を出して阻止の運動をしたり、社稷のために薩長の鼻息をうかがうにいがしく、そのために神宮寺の諸建築や天守閣など大切な文化財を必要以上に失った観が深い。

この間に文久元年（1861）11月には和宮の降嫁、中山道御通りの警衛に当たったり、元治元年（1864）11月には水戸浪士と和田嶺に戦ったりもした。忠誠は48歳（1868年）で隠居した。

10代藩主忠礼（ただあや）は、慶応4年（1868）本家養子となり、15歳で封をついだ。徳川慶喜が大政を奉還し、新政府から大政復古の論告が発せられた直後であり、時局の複雑に動くときであった。

忠誠が早々に隠居したのは、彼が佐幕派と見られて風当たりが強かったためと思われるが、忠礼が弱年のため後見役をつとめたので、忠誠の政治といってもよい。

上島が生まれた天保期には、世の中、不穏な空気が漂っていた。遠山の著書には詳しい「年表」が載せられている⁽¹⁹⁾。

天保元年 水戸藩（徳川斉昭）・薩州藩（調所広郷）、藩政改革に着手にはじまり、諸国飢饉、一揆・うちこわし激化。大飢饉、百姓一揆激化、郡内騒動起る。大塩平八郎の乱。生田万の乱。渡辺崋山・高野長英捕わる（蕃社の獄）。

全国的にも、江戸末期・天保、弘化、嘉永、安政年間は大変な時期に当たっている。不況と開国問題でおおわらの時代であった。

天保12年、幕政改革（水野忠邦の「天保の改革」）はじまる。異国船打払令を停止。江戸・大坂上知令撤回。

借金で首の回らなくなった旗本など武士を救うため、幕府は次々と借金帳消しの改革政策を打ち出したため、特に、それまで隆盛を誇ってきた札差も壊滅的な打撃を受けた。「蔵前の旦那衆が、たった一日で没落した」という噂が江戸中を駆け巡ったり、あれほど貴重だった札差株は、大暴落して買い手がつかなくなったりしている。

弘化元年 オランダ国王、幕府に開国を勧む。アメリカ・イギリス船来航。幕府、老中水野忠邦を罰す。米使ビッドル来航、国交を求む。朝廷、海防勅諭を出す。朝廷七社七寺に勅して外患を祈攘す。

オランダ東印度総督、幕府に開国を勧告。安政元年（1854） ペリー来航。日米和親条約（神奈川条約）締結。

* 上島が江戸へ出た理由について

安政2年（1855）は、上島が江戸へ出た年である。そのころ、佐幕派（幕府側）と勤王攘夷派（勤攘派、倒幕派）に分かれて血で血を洗う抗争になっていた。小藩ではあるが譜代の高島藩でもどちらに与するかで論争が行われていたに違いない。9代藩主が幕閣に入ったが、結果的に何の良い効果をもたらさなかったということもあり、最終的には勤攘派につくことに決していたようである。

その証拠に、明治になってから、高島藩では、いち早く上洛して勤王の志をあらわし、版籍奉還聴許（版籍奉還を願い出る）し、結果、第10代藩主忠礼は、版籍奉還後の明治4年、東京に移って、270年続いた高島藩は廃藩となった。忠礼は、藩知事、県知事とうつり、華族に列せられ子爵を授かっている。

上島家は、270年間という長い間高島藩に仕えてきた家柄である。幕府とは一蓮托生の関係である。3万石の高島藩も幕末期には藩財政は逼迫し、藩政改革と緊縮財政が行われていたことは疑う余地がない。上島家の俸禄も減少していったに違いない。こんなことをしていたら、やがて藩も危ういという気運が高まっていったのではないか。藩主忠誠が幕府の中枢に入ってもまったく効果がなかったということもある。

上島の父幸右衛門も重臣の身、こうした高島藩の動向は掴んでおり、いずれは藩も危ないと察知していたと考えてもあながち間違いとは言えないであろう。

いずれにしても、父は、文芸に精を出していた上島に江戸の様子を自分の目で見てくるように命じ、場合によっては、その後の身の処し方を自分で考えるように諭したかもしれない。

江戸には高島藩の藩邸があったと思われるが、そこには知られたくないと、幸右衛門はひそかにその旨を江戸の知人に書状をしたため上島のことを頼んだのではないか。

結果、江戸へ出た上島が見たものは、不穏な空気の世情であり、最たるものは佐幕派と倒幕派との血なまぐさい抗争であった。「天保の改革」では武士の借金を帳消しにするという内容の乱暴なものであった。幕府や武士の権威はつぶれていた。

こうした中で、高島藩の重職である奉行の嫡男が、その身分を江戸で明らかにすることはかえって身を危うくすると覚ったはずである。逗留先の森備中守屋敷富木衛門七方へも迷惑が掛かる状況となっていたのかも知れない。

時の権威に対する上島の反発も大きく、半年間、国元と頻繁にやりとりしていたが、結局、武家を捨てる方を選択した。上島は町家に奉公することは、国元の指金（さしがね）であった可能性もある（一悶着あったとは書かれていないので）。

ただ、その後店を出すことには反対されている。国元の資金不足があったのかもしれない。

真相がどうあれ、上島は、幕末期の混乱の中で、権威を失った武士に見切りをつけたというのがもっとも説得力のある説である。

先がどうなるかも誰も分からない。国元へ帰っても心許ない。こうしたとき、武士でなければ何でもよいと考える。自分で働き生活していけることは何か。町人になるしかなかった。それは父幸右衛門も納得しなければならなかったのだろう。

つまり、これから一体何をして食べていけばよいか、と考えたとき町人だったということではないかと筆者は考えている。

一方で、当時、武士が町人になったのは珍しいことではなかった。明治・大正期の日本画壇の大家で随筆も書く鍋木清方は、「幕末を廃頹（はいたい）期のどん底のようにいう人がある」が自分も同意すると書きはじめた上で、こんな時代、武士も手をこまねいては食べていけないと、いろいろな職に手を出していたと書いている⁽²⁰⁾。

明治の初年といえば、ながいあいだ大江戸に覇を唱えた徳川幕府が瓦解して、御譜代といわれた家がらでも、大津浪のように押し寄せた御維新の世替り代がわりには、ただ手を拱（こまね）いて何ごとも御時世と諦めるより他はなかった。

士族の商法という諺が生まれて今はそれもまたこと古（ふ）りた昔の諺となったが、旗本の殿様が鰻（うなぎ）を割いたり、汁粉屋をはじめて、給仕する文金高島田のお嬢様が、これこれ町人と呼ぶおかしみの「士族のしるこや」は、三遊亭遊三というはなし家のおはこであった。

*町屋への奉公について

堅実に自分の手で稼ぐことを考えた上島は、まず、町屋へ奉公に出た。どういう商品を取り扱う店であったのだろうか。実際に何を取り扱っていたか定かではない。借金を帳消しにされかねない札差ではなかったことは確かだろう。

当時、上諏訪の平民の次、三男は、江戸（東京）へ出て、海に縁のない国・養蚕国の出身なのに「海苔商人」とか「米商人」になっていることが多かった。それらを頼ったか。

上諏訪では、武家の出であることからそれは避けたであろう。繊維・呉服、家具・調度等の店ではなかったか（これは、後に行商人になることと関係していると思われる）。

上島は、10年間奉公している。どこへ奉公したのであろうか。かなり大店（大規模な商家）であったのではないか。

友部謙一・西坂靖（2009）によると、江戸期の大店と言えば、呉服商（絹織物販売）が代表的なもので、500人以上の奉公人を抱えてるところも相当数あったという⁽²¹⁾。

例えば、18世紀前半の三井家の「越後屋」では、京都の4店舗、江戸の4店舗、大阪に1店舗の9店舗を擁していたが、生産地西陣がある京都の店舗で仕入れ・加工を行い、その品物を大需要地である江戸・大坂の店舗で販売するという仕組みで商売していた。「越後屋」の3地域総奉公人数は、1,020人で、職階は「手代」、「子供」、「下男」に分かれていた。手代はさらに細かく、「平手代」と「名目役」に分かれ、それぞれに職階（18段階）があり、仮に、17歳で入ったとして約10年で平手代の筆頭というところである。その上の名目役では12段階あり、最終の「元メ」に到達するには、そこからまた30年ほど掛かり、結局70歳近くになってからのこととなっている。

上島は10年間奉公している。つまり、手代の筆頭くらいまでいったところで、ある程度の商売の仕方が身に付いたので自分の店を出そうとしたが、上手く行かなかったということかもしれない。

ところで、ここで注目すべきは、大店が奉公人の勤労意識を引き出す手立てとして「心学」を活用していたということである。店の費用負担によって、手代あたりを対象に年間10回程度「心学講釈」が行われ、「働くことに価値を見出させよう」としていたという。このことも、国元の上諏訪で盛んに教えられていた「心学」に親しみがあったすると、上島にとっては奉公しやすい理由の一つになるであろう。

2-2. なぜ行商人や測量士になったのか

*行商人になって何を取り扱っていたのか

上島の日記には、

町家に十年の間奉公致しました。基後、江戸に来て商店を開く積りを立てましたが、父が許して呉れないために江戸・大阪の間に行商をやって居りました。

とある。なぜ、上島は行商人になったのか。どんな物資を取り扱っていたのか。文献資料などから筆者の類推は、以下のようなものである。

当時の江戸・大坂間の物資は、船で運ばれていた。しかし、難破することが多く貴重品を無にすることも多かった。このため、陸上を使う伝馬・継飛脚が発達していた⁽²²⁾。

そこで、上島は、それまでの10年間奉公していたときの知識・経験を生かすことのできる絹

織物や生糸そして小間物や家具調度品などの高級品やその原材料を取り扱う、伝馬・継飛脚のような仕事（運び屋：相当な収入・収益になる商売）をしていたのではないかと筆者は考えている。

＊測量士になったのはなぜか

東海道（江戸ー大阪）の距離は、（日本橋～大阪）546.3 km とある⁽²³⁾。途中に、上諏訪がある。上島は一日 120 km 歩いたというから、江戸ー大阪間を 4.5 日で歩いた計算になる。しかし、次第に同業者も増え、利益も薄くなってきている。

江戸・大阪の間に行商をやって居りました。私は道を歩くことが達者で、実の所その時分には一日に三十里（筆者注：120 km）位歩きました。世の開けるに随って利益が少なくなりましたので国に帰り農・商の両業を営む傍ら庭作りなどして楽しく月日を送って居りました。

そうばかりもしておれないので何かよい職はないかと思案していたところ、明治 6 年、「地租改正」があったので、早速東京へ出て測量士になる⁽²⁴⁾。

明治 10 年ごろの世相については、作家坪内逍遙の小説『当世書生気質』に映し出されている⁽²⁵⁾。東京には全国から人々が仕事探しに集まり、とりわけ人力車夫と書生が、あふれかえっている様など、時代の混乱状況が描かれている。

職業を選んでいる場合ではないことは、上島も良く分かっていただろう。

3. 札幌に来てから —— どのようなことを成したのか ——

3-1. なぜ札幌に来て米作りをすることになったのか

＊測量の弟子に札幌出身がいた

明治 7 年に地租改正の時に測量官になりまして東京近傍は悉く測量しました。この時分でございましたが、札幌に居た者で私の門人になったのが一人ございました。これは苫小牧・札幌間の道路の出来た時分に使われていた者で、北海道の事情は一と通り通じて居り、この者から毎度、北海道の様子を聴き面白く感じて居りましたが、つまりこれが当地に来る基になったのです。自分は相変らず相州秩父山から小田原附近を測量して明治 10 年 1 月に一旦帰国し（筆者注：湖南村へ）、測量を断って当地に来る様になりましたが、色々な話がございます。

測量士になったこと、そして各地を測量して歩くことが、札幌に来ることと札幌に来てから大いに役立つこととなる。

*当時の札幌はどうだったのか

以下の説明が参考となる⁽²⁶⁾。

当時の日本は明治維新による混乱期で、官軍（朝廷側）でなかった藩はとりつぶされ、禄（「ろく」藩主から与えられていた土地やこめなどの武士の収入）を失った士族（武士）や貧しい農民達が社会不安のもとになっていました。そこで、明治政府は北方の防備と開拓という2つの使命を担った「屯田兵」（とんでんへい）を北海道に植民させることになりました。

.....

この考えは、明治政府にとっても一石二鳥のアイデアだったに違いありません。政府はさっそく屯田兵のきまりごとをつくり、明治7年には札幌郡琴似村に屯田兵の家200戸の建設を開始しました。翌年の明治8年には、198戸、965人が移住し、屯田兵村ができていったのでした。

一方、石狩平野は日本海岸式気候に属するため冬季の積雪量が多く、亜熱帯の植物である「稲」の栽培にはとても向かない土地と見られていた。江戸期の松前藩も米作りには手を出しておらず、したがって、通常の米の石高ではあらわされない藩ということから、「無高の一万石格」とされていた。もっぱら漁業中心の取引に専念する藩であったので、松前藩主は、「商人大名」と言われたりしている⁽²⁷⁾。

明治初期に開拓アドバイザーとして雇われたホーレス・ケプロンが農業に関するさまざまな意見具申をしているが、寒冷な風土を理由に、米の生産はネガティブとしていた。

そのため、開拓使は、屯田兵などに対し、稲作の試みそのものを禁じている⁽²⁸⁾。

屯田兵には米を支給していた。屯田兵が耕作していたものは、ひえ・粟・そば・麦・南瓜・唐きびなど、寒い土地でも育つ穀物であった。米作の禁を破ると罰則も設けられていた。

*札幌で最初に米作りをやるうとしたのはなぜか

上島の業績の一つとして筆者のあげる、「〈1〉札幌において単独で米作りに成功したこと」というのは、やや、おかしな響きを持つ解釈であるかもしれない。

しかし、このことは厚別をはじめ札幌圏各地へ入植した人々が、なぜ、いきなり米作りをしたのか、することができたのか、ということと大いに関係している。札幌圏における米作りこそ、上島のアドバイスのお陰であるといっても過言ではないのである。

明治の初め、札幌ないしその近郊で新しく出来ることと言えば、酪農、炭焼き、花園そして農地開拓であった。例えば、エドウィン・ダン（Edwin Dun）は、札幌歴史資料館の「札幌の歴史を築いた先人達」の一人とされているが、アメリカ・オハイオ州生まれで、明治6年(1873)25歳で来日、北海道開拓使に招かれたお雇い外国人である。札幌の真駒内で畜産を成功させ、「北海道農業の父」「北海道酪農の父」「真駒内用水路の父」「近代競馬の父」と称されている。

明治7年に「地租改正」があり、37歳で測量官になって3年間勤めている。(37歳～39歳、

(1874～1877)。この時期に、測量の弟子に北海道の話を聞き興味を抱いている。

40 歳になった明治 10 年 1 月に、一旦、上諏訪へ帰国、その後、単身で東京を経て横浜港出航、陸前の萩の浜へ、暖くなるまで気仙沼に逗留し、その後青森などに寄り道をしながら、函館、小樽を経て(明治 10 年 5 月 18 日に)札幌にやってきた(上諏訪から 4 か月ほど掛かっている)。

小樽では、以前測量をしていたとき親しくしていたものより小樽の星川竜蔵という人への紹介状をもらっていたので、そこへ 20 日ばかり逗留している。その後札幌では浦河通り(東二丁目)の高橋亀次郎方に下宿している。そこで、20 日間ほど近隣の实地調査を行う。

そのうち、下宿料をまけてもらったので遠くまで足をのばす。

〈日記〉

西は銭函、南は山鼻、東はいざり、北は篠路辺まで地質や地形を探りました。

と一ヶ月程掛けて歩き回っている。なかなか適当なところを見付けられないでいたが、いろいろするうち現在の場所を見出したとしている。ここは、前年できた農作地であったが、五月以来ただ滞在しただけなのも馬鹿らしいので、水田の出来そうなところを見付けて稲を植えてはどうだろうか考える。

上島が、札幌にやって来た早々、札幌も人口が増え、米の値段も高騰してきていた状況を見たとき、屯田兵の作れない稲作をしてみようと考えたのは先見の明があったとしか言いようがない。

しかし、いきなり米作りが成功したわけではないかもしれない。

北海道でも早くから各地に米作りの痕跡が残っているらしいが、札幌ないし札幌近隣で本格的に成功したのは、中山久蔵という人物と言われている。明治 6 年のことで、そこは千歳郡島松村漁(いざり)(現在の恵庭市)であった。中山は、「寒冷地稲作の父」といわれている⁽²⁹⁾。

(なお、札幌農学校のクラーク博士が札幌を去るとき学生たちと島松で別れたとあるが、その時の駅通がこの中山久蔵であった)

上島も中山の話は聞いていたかも知れないし、実際に「いざり」を探查したときに、中山久蔵の水田を見ていた可能性は高い。札幌にも人口が増え、米の値段も高騰してきていたので、屯田兵の作れない稲作をしてみようと決心したとしてもおかしいことではない。

日記にも、

江戸・大阪の間に行商をやって居りました。私は道を歩くことが達者で、実の所その時分には一日に三十里くらい歩きました。世の開けるに随って利益が少なくなりましたので、国に帰り農・商の両業を営む傍ら庭作りなどして楽しく月日を送って居りました。

とあったので、そのころ、農のうち園芸はもとより、水田も手がけていたか、もしくは、稲作についての知識や研究をしていたかもしれない。

決心したあとの動きは早い。まず、土地と稲の苗を確保しなければならない。当時の開拓大書記官の調所廣丈まで願書を出したが却下されている。しかし、どうしても残念なので、また願書を書いて直接調所宅まで押しかけて許可してもらおうとする。

調所は、それは繁松某が却下したものであるから、そちらへ行くがよかろうという。

（その後、繁松某のところへ行って交渉するのであるが、この辺り、日記には最も興味深く書かれている⁽³⁰⁾。）

とにかく、この年（明治 10 年）米作り成功したことで、12 月には湖南村南真志野へ帰り、全財産売却している。さらに、東京で家族を伴って小樽経由で札幌（札幌村東耕：現在の北 8 条東 8 丁目 53 番地）に入って終の棲家としたのが、明治 11 年 6 月であった。

上島の稲田成功の跡を辿ると、以下のようになる。

明治 10 年に 39 歳のときやってきて、ある程度水田耕作ができると判断する。そして、明治 11 年（1 年目、40 歳）、1 反半耕す、300 円（300 万円程度）の収穫。

（この頃の 1 円は、平成 21 年 10,000 円と換算）

明治 12 年（2 年目）に、6 反耕し、300 余円収穫。

こうして上島は、上島の日記の中に登場する高橋亀次郎とともに、札幌市内での最初の米作り人になったと考えられるのである。

とにかく、札幌を終の棲家とした明治 11 年は、上島にとって生涯忘れることのできない感激的な年になったと書いている。上島 41 歳であった。

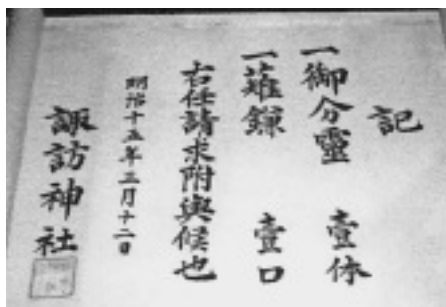
彼はする中、その年（筆者注：明治 10 年）も十二月となりました。で、一ト先ず帰国し財産を悉く皆売り払い、東京より随行の一家族諸具を連れ、小樽へ着きましたは翌年六月三日でしたが、その時の嬉しさと云うものは今に忘れる事が出来ません。

こうしてみると、17 歳で家を出て、直ちに、町屋に奉公に出て 10 年間、27 歳になって、行商人となり、江戸～大阪間を往復したり、ときどき、途中にある故郷（上諏訪湖南）に寄って（帰って）農・商業や園芸をしたりして過ごす。37 歳まで 10 年間に及ぶ。（1865～1874）。

江戸時代から明治初めにかけて江戸を中心に合計で 20 年ほど商売を経験したことになる。ここから、上島には、青少年から壮年に掛けてのさまざまな職の経験から、商売気（商才、ビジネス感覚）をもつようになり、道々の見聞や上方文化にも触れ文人感覚も養われたと想像できる。

商業の方が競争者も多くなって、利益が薄くなってきたので、測量士となる。3 年間の測量士を経て札幌にやってきた。

時代に翻弄され、波乱に満ちた来し方を振り返ったとき、米作りに成功し、家族を引き連れ札幌に落ち着いたとき、深い安堵感が上島を襲ったのではないか。



(熊沢 猛氏提供)



札幌から駆けつけた上島家の末裔の人々と熊沢猛氏（左から3人目）

(中澤 豊氏提供)

神に感謝したかもしれない。諏訪神社の御分霊を戴いてきたのもそのあたりの心境をあらわすものであろう。

上島は、国元を去るに当たり、先祖代々の墓守を熊沢亀吉に託している。上島の父幸右衛門は当時普請奉行を勤めていたと考えられ、代々大工であった熊沢家との関係もそこで生じていたのであろう。

熊沢亀吉から3代目猛氏(2代目は直治)は語る。「上島が北海道に渡るに際して、墓守を“同年代で友達付き合いをしていた”大工亀吉に託した」と。

上島家の墓は現在の場所より上にあったが、高速道路ができたので、若干下に降ろされている。昭和 49 年(1974 年) 移転時には札幌からも末裔の人々数人が駆けつけて移転記念式を執り行っている。

3-2. なぜ上諏訪から大勢の人々を連れてきたのか

上島には、一つの思いが芽生えたかもしれない。もともと上島は上諏訪の武家の出である。それが維新で没落してしまった。国元の人々の暮らしも楽そうではない。自分も国元の人々も何とか新天地で楽な生活を享受できないかと考えたのではないか。一族の再興を目論む気持ちと同じだったかもしれない。

とにかく、上島は、牛山民吉(長野県東筑摩郡二子村出身)なる人物の開成会社が人員募集しているというに应じる形で、札幌へ来てから 5 年目(自身 45 歳)の明治 15 年、上諏訪へ赴き、故郷の人々に北海道移住を勧奨する。自身の成功をもとに説得したと思われる。

結局、10 余名を連れてきたが、東京で牛山に面会すると約束と大いに相違することが分かったので牛山とは破約する。そして、札幌で別に一村を作る計画を立て、東京から同行した河西由造等 20 余名を引き連れて札幌にやってきた(合計 30 余名)。

彼らのうち、「当時国許から来た連中は普通移住とは違って少なくとも七、八百円多きは千円以上(600~1,000 万円程度)の金子を懐中して居りました、で結局随意に地所を買うことになりました。」とある。(筆者注：明治 16 年の 1 円は、平成 21 年の 9,171 円に相当)

結果的に、上島は、明治 15 年に 30 名程札幌に連れてきている。具体的に誰だったのか。

上島の日記には何人かの名前が登場する。また、その人たちが札幌へ来た後、どこへ向かったかが示されている。例えば、

◎武井惣造(出身 豊田村)、伊藤庄五郎(出身 一)、武井惣太エ門(出身 一)：(以上、3 名、札幌村へ)

◎茅野鶴蔵(出身 宮川村)：(丘珠村へ)、

◎伊藤磯八(出身 一)：(円山村へ)、

◎宮坂坂蔵(出身 諏訪郡上諏訪村)、濱 清吉(出身 一)：(以上、2 名、琴似村へ)

◎花岡太吉(出身 諏訪郡湖南村)、金子半蔵(出身 中州村)、後町万太(出身 一)、中澤兼三郎(出身 諏訪郡湖南村)、河西由蔵(出身 一)、小池嘉一郎(出身 宮川村)：

(以上、6 名、月寒、篠路、厚別等へ)

また、日記では、明治 15 年に連れてきた者のうち、持参金の多かった人は土地を買い、少なかった人は開拓へと散っていったとある。しかし、それぞれが具体的に誰々であったかまでは記述されていない。

ところで、(明治 15 年に)上島と一緒に来たのは、実際には 30 名ほどいたようであるが、上記以外の名前は分かっていない。また、誰が上諏訪から一緒だったか、誰が東京から加わった

のかも分からない。

3-3. 札幌で成した顕著な業績は何であったか

一村（例えば、上島村）は作れなかったが、ある意味それ以上の業績を残した。札幌の広い範囲に渡って連れて来た人々が散らばり、それぞれの地域を存分に開拓していったからである。

上島自身の業績については、若林功が昭和13年に書いた『故河西由造小傳』の中に記述されている⁽³¹⁾。

是（由造が札幌に来た）より先上島と云ふ信州人が明治十一年に札幌に来て東臯園と総する花園を経営してた。東臯の語源は判らぬが、臯月は五月、五月は花菖蒲の月である。それかあらぬか東臯園は花菖蒲の変種の多いのを以て世に知られ、彼も亦之を大に誇りとして変種育成は彼独特の技能として深く秘してた。何んぞ図らんその秘技は札幌農学校の御雇教師たる米國人から雌雄蕊の所在と交配の方法を教へられて修得した応用植物學であつた。彼はこの交配の原理から推理して人間の子を生む秘傳を知つてゐたと世人の噂が高かつた。

筆者は、上島が米作りと大勢の人を札幌に連れてきたこと以外で成したことは、以下の①～④までに集約できると考えている。

① 東臯園と札幌諏訪神社の創設

札幌歴史資料館の「札幌の歴史を築いた先人達」では、上島が精魂込めた努力により完成した花畑「東臯園」や信濃國一の宮諏訪大社のご分霊を奉祭した札幌諏訪神社を最初に建立した人として紹介されている。

上島 正の精魂込めた努力により完成した〔東臯園〕は、当時の札幌市民の憩いの場として大きな役割を果たしましたが、現代風に言えばイベント会場としても利用され、句会、暮会、謡曲などが盛んに行われていたようです。当時、開拓使の構想によると、札幌の東西南北に大規模な公園を作る事として、西には〔円山公園〕南には〔中島公園〕北には〔偕楽園〕そして東には〔東臯園〕が計画されていました。円山・中島公園は現存していますが、偕楽園、東臯園は、現存していません。この計画が実行されていたならば札幌の町並みも趣を異にしていたかも知れません。

「東臯園」は花菖蒲が中心だったようである。実際上島が東京のどこに住んでいたかは明らかではない。しかし、上島が明治15年に東京より一緒に来た厚別中央の開拓者河西由造と親交があったとすると、東京における由造の住居（東京府本所区本所番場町18番地：現在の東京都墨田区本所1丁目）のあった辺りは、江戸期より花菖蒲の名所が多いところ（堀切菖蒲園、小岩菖蒲園、しょうぶ沼公園など）として有名であり、上島も見学していたかもしれない⁽³²⁾。または、彼自身この近くに居住していたこともあり得る。



「東臯園」の菖蒲，向こうに上島が見える（熊沢 猛氏提供）



「東臯園」での上島正（中央）（熊沢 猛氏提供）

札幌諏訪神社の建立に最初に携わったのは，上島であった⁽³³⁾。

明治 33 年 1 月に出された『諏訪神社信徒人名簿』のトップは，「上島 正」（札幌区北 8 条東 1 丁目 53 番地）である。「上島惣五郎」（札幌区北 2 条西 13 丁目 1 番地）の名も見える。

② 「人為交接」と「切り花の水揚げ」の成功

日記には，花菖蒲やその他の植物の「人為交接」と当時難しいとされていた，萩や天竺牡丹（ダリア）などの「切り花の水揚げ」の成功の経緯が詳しく書かれている⁽³⁴⁾。

③ 著書「妊娠自立法」の出版

花菖蒲の交接法に成功し，それが基で日本園芸会の委員を委嘱されるまでになった。その交接法を人に応用してみるという内容の「妊娠自立法」という本を，明治 28 年に出版した。実際に適応して成功した例が〈日記〉に書かれている。

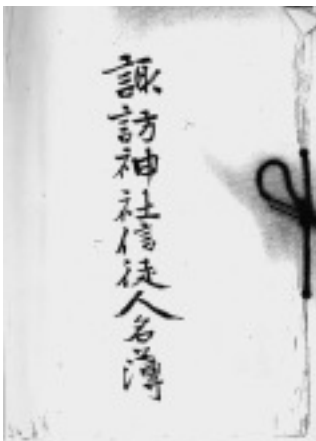
東京の菖蒲園



出所：帝国書院編集部編（2006）『旅に出たくなる地図 日本』⁽³¹⁾。



現在の札幌諏訪神社



名簿の表紙：

明治二十八年に「妊娠自立法」という小冊を発行致しましたが、最初是不都合の虞があると言ふので発行を停止されました。其の後、訂正を加へまして発行し、現に南二条西四丁目の大畑帳面屋に売って居りますのがこの本です。この法といふのは、年久しく考へたもので、いよいよ確定致しましたは、前に申しました植物交接法からです。

先に引用した、若林功の一文（河西由造について書かれたも物）にも上島の著書の話がでてくる。

(由造)はより先上島と云ふ信州人が明治十一年に札幌に来て東臯園と総する花園を経営してた。東臯の語源は判らぬが、臯月は五月、五月は花菖蒲の月である。それかあらぬか東臯園は花菖蒲の変種の多いのを以て世に知られ、彼も亦之を大に誇りとして変種育成は彼独特の技能として深く秘してた。何んぞ図らんその秘技は札幌農学校の御雇教師たる米國人から雌雄芯の所在と交配の方法を教へられて修得した応用植物學であつた。彼はこの交配の原理から推理して人間の子を生む秘傳を知つてゐたと世人の噂が高かつた。

と書いている。しかし、若林自身が、「妊娠自立法」は読んだかどうかは定かでない。

④ 上島の絵巻物

上島は、開拓使大書記官調所廣丈が述べたように、虚舟と号する南画の絵巻物を北海道開拓記念館に残している。

3-4. 自己の人生をどのように振り返っているか

上島は、自分の来し方を振り返る。上島の日記の最後の日(明治三十三年十月二十七日)には、63歳まで生きてきた自分の総括を行っている。要約すると、「誰にも仕えない楽しみ」となる。

しかし、仙人気取りでいたものが、またもや世に出てまごまごする様になつたからとて、別に悔やみも致しません。これも矢張り世間並みの事ですから、まあこふやってしがたい姿でもして居れば、或る人々の考へでは詰らないとか何とか思うようなこともあるかも知れませんが、私の身に取りましては王侯や貴人、さては名誉の奴隷になり込んで、世に銜(てら)う族達の味わえぬ楽しみがあります。気楽で世を通て行く塩梅はマア佛家という極楽世界とでも申しましょうか。私は全く楽天主義でござり櫛。古歌にも

上見れば、及ばぬ事の多かりき かさ着て夢をおのが心す

とやら言うのがござりますが、万事を上を望まず謙(へりくだる)るということに心を用(い)てご覧なさる通りにこうやって毎日足に草履をはき手には鋤鉤を取るのです。

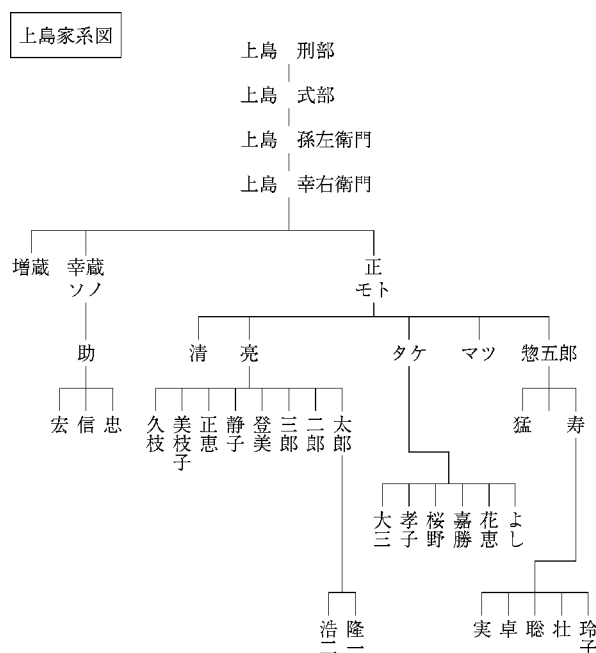
しかし、六十過ぎて若かりし昔の事など想い回(めぐ)らしますと、「宿昔青雲志」とやらしい詩もある通り方外な望を起こしたこともありまして、今ではかなしいかなツイ胸に浮かびます時には、我が影法子にさえ気恥ずかしき事もござります。また思い返して矢張、今の境界(報いとしての境遇)が勝し(他に勝つていた)であつたのだと考えなほすような次第で、口外もかようなのが浮かびましたよ。勿論ふ味ことは不味がほんの意味だけをご覧なして下さい。

極来てこんなものかとおもう成り 花のうてなにまさかおらねぞ

(筆者訳：きわみまで来てこんなものかと思う。花が無ければ何か香るものがあっただろうか)

*上島家の系図

上島家の家系図を中澤豊氏（厚別中央歴史の会会員）が作成している（氏からは、これはあくまでも仮のものという念を押されている）。



◎上島 正は天保9年(1838)5月15日の生まれで遠祖は信濃国上伊那の上島城主であったといわれ、父上島 幸右衛門はその末裔であり正はその嫡男である。

(厚別中央歴史の会会員 中澤豊氏作成)

この図から想定されるのは、

- i) 結局、「上島孫左右衛門」以下の上島家の子孫はすべて札幌に代々居住している。
- ii) 上島 助（上島正の従兄弟）も、明治13年にやってきており（上島の日記）、末裔（上島 信）も札幌にいる。
- iii) 上島 正の直系（上島太郎）は、札幌在住。（兄弟）上島惣五郎（札幌諏訪神社信徒の中に名前あり）とその末裔、上島 寿は札幌に在住。
- iv) したがって、上島家の子孫は湖南村には誰もおらず、墓守は3代に渡って湖南真志野居住の熊沢家（現在 猛氏）が守っている。

次頁の写真は、上島一家のものである。



上島家 下段 左から長女マツ，上島正，妻モト，次女タケ。上段は不明。(長女マツは米倉勝之助と，次女タケは小池嘉一郎と結婚)

出所：米倉勝美著『おやじの背中・我が家百年の歩み』⁽³⁵⁾。

おわりに（上島 正は札幌の企業家第一号とも言える人物であった）

これまで，上島の札幌で成した二つ点，

〈1〉 単独で米作りに成功したこと（札幌で最初の米作り）。

〈2〉 上島の故郷（信州信濃の上諏訪）から大勢の人々を連れてきたこと。

を中心に考察を進めてきた。

改めて「上島 正」の波瀾万丈ともいえる生き様を考えてみる。

現在のわれわれが，かつて北海道を開拓した人たちに描く大半の印象は，艱難辛苦の生活歴であろう。しかしながら，上島には，当時の開拓者の例としてよく挙げられる依田勉三などと違って，悪戦苦闘した開拓者のイメージはほとんど湧いてこない。

彼の日記からは，開拓を楽しみながら実践した様が浮かんでくるから不思議である。

今日の札幌の地で高橋亀次郎等とともに，はじめて成功したと思われる稲作についても苦勞の末という感じはでてこない。田畑を耕し，花卉を愛でる一方で，時に詠い，時に描く（書く），何とも活動的な人生を送っている。日記の最後に悔いない人生を送って来たという自負も覗いている。こんなことはお釈迦様でも分かるまい，と言っている。

日記でも「気楽で年を経て行く塩梅はマア佛家でいう極楽世界とでも申しましょうような私は全く楽天主義でござりました」という感想を吐露している。

小池睦郎氏も『川下百年誌』の中で書いている⁽³⁶⁾。

花の交接法を研究し好結果を得た。すべての花卉にこの方法を応用し悉く好成績を納めた。十

七年、時の開拓使大書記官調所広丈同園に來遊して幌都庶民一般の縦覧をすすめた。で、これを東耕園（のちに東阜園に改む）と命名して一般に公開した。又その種子は内地各府県にまで知られ、花菖蒲については遠く米國に輸出するようになった。「シャクヤク」「球根」等はひろく各府県に移出し有名であった。

又、翁の人柄について次のように書き記している。

「翁天資清秀寛容にして百芸に精通す就中虚舟と号して南画を善くす詩文、和歌、俳句の造詣深く亦能書の聞へあり、三十二年、翁が六十二の時、渡道当時より現在に至る迄の開墾辛酸の実状を絵画に写して子孫に伝うるものあり、其筆致健靈犀にして輕妙なり其卷末に

古を忘れぬ種にならばやと 伝へのままをかきしるすなり 六十二翁

上島自身、先述されたように、誰にも仕えなかった気楽さについて書いている。

諏訪市・諏訪市教育委員会編（1985）の『諏訪藩主展』（パンフレット）の「はじめに」の冒頭に以下の記述がある。

諏訪地方には、他に例をみない独特な歴史的風土が存在する。それは今なお、この諏訪の地と人々の中に脈々を息づいているのであるが、歴史を顧みるならば、この風土の形成過程において最も重要な位置を占めるのは、諏訪神社の発展に代表される中世の諏訪と、諏訪藩（高島藩）の成立と繁栄に代表される近世の諏訪であろう。

諏訪の歴史は多くの名もなき私たちの先祖たちが担ってきたのであるが、歴史書に名を残している人々の活躍も、時の支配者階級の在り方や個人の役割を表わしているばかりでなく、各々の時代性を示すひとつの象徴としても重要である。中世の諏訪では諏訪神社上社大祝として、近世の諏訪では諏訪藩主として、古来一貫してこの地における領主家であったのは、神（みわ）氏（のちの諏訪氏）である。近世における諏訪藩主家十代の居城であった高島城の復興十五周年を記念するこの「諏訪藩主展」は、藩主という時代のひとつの象徴を通して、諏訪の歴史的風土の形成について問い直してみようとするものである。

歴代藩主に直接関係する数々の展示品は、私たちに江戸時代の諏訪をより身近なものを感じさせてくれる。

として、歴代（1代～10代）諏訪藩主（高島藩主）たちの業績が綿々とつづられている。結局、高島藩とはどういう藩であったのについて要約してみると、

①書画、俳諧を積極的に取り入れた

②高島藩は譜代であったが、幕末期、時局が複雑に動く中、最終的に倒幕派や官軍についた。10代藩主忠礼（ただあや）は版籍奉還後、藩知事、県知事とうつり、華族に列せられ子爵を授かり、のち指令によって忠礼は東京に移り、ここに高島藩は終止符を打った。

筆者は、上島にこうした背景を被せてみている。

江戸期の幕政改革には、享保の改革、寛政の改革、天保の改革という3大改革がある。いずれも「儉約令」中心の緊縮財政改革である。

大岡越前なども日本初という流通政策（価格政策）を打ったりしている⁽³⁷⁾。

将軍吉宗の享保期に町奉行であった「大岡忠相（越前守）」は、物価安定のために流通政策に取り組んだ最初の役人とされている。幕府の財政が苦しくなったとき、貨幣を悪鑄・増発したが、物価は騰貴し、財政はさらに悪化していった。幕府は、通貨統一と流通量の収縮を図ったりしたが、このときの相場で儲けたとされる両替屋を、忠相が摘発し、罰している。

以後、忠相は、日本型流通システム、とりわけ問屋から仲買（二次卸と考えてもよい）を経て小売業へと商品が流れる仕組みの成立に、深く関わっている。商人の過剰利潤をなくす、買い漁り競争を防ぐことによって仕入れ価格の高騰を防ぐというものであり、その後の「物価引き下げ令」へとつながっている。適正利潤は1割5分、価格操作で超過利潤をむさぼった場合は、忠相によって摘発された⁽³⁸⁾。

江戸期では、それに先立つ室町・安土桃山期で栄えた自由競争を押さえつける政策を取り続けたということにほかならない。とにかく、流通経済を沈滞化させたことは間違いない。

特に、幕末期、天保の改革では借金で首の回らなくなった武士を救うべく「借金帳消しの令」を出して札差を混乱に陥れるなどの暴挙に出た。上島としては、借金帳消しで喜ぶのも情けなく、そんな人間を救わねばならない武家政治にも愛想が尽きたのではないか。

そうした商（ビジネス）を抑えつける政策を取り続けたところへもってきて、幕府が出版物や絵画など芸術関係までも規制するに及んで、人々の楽しみや夢までもなくしていった。

とにかく、上島は、幕末期の混乱の中で、権威を失った武士に見切りをつけた。幕府側（佐幕派）と勤王攘夷派（倒幕派）に分かれて血で血を洗う抗争の姿を見て武家に嫌気がさした。

そうかといって、国元へ帰っても、もともと武家の出身であってみれば状況がもっと悪くなることは必定である。

先がどうなるかも誰も分からない。武士でなければ何でもよいと考える。自活していけることは何か。一体何をすればよいのかと考えたとき町人だったということではないか。

しかし、あまりにも早い転職の決断である。江戸へ出てから半年で町人になっている。どういう判断があったのか。国元と相談したのか、はたまた、国元の命令だったのか。

いずれにしろ、その後は江戸・大坂間の行商人をやり、さらに測量士になって札幌へやってきて開拓者になっている。

考えてみれば、上島のような時代を見通す力、変化の方向性の読みの鋭さ、決断力の早さ、変わり身の早さ、自らの手による新しい世界の開拓をしようとする者にとって、北海道開拓はうってつけの場所であったといえるのかもしれない。

かくして、上島は、札幌に安住の地を見出した。そして、自身の経験に基づいて、上諏訪へ outgoing 人々を連れてくる。

もっとも、上島には一つの“志”が芽生えていたのかもしれない。一度捨てた故郷・上諏訪である。残された人々もあまり幸せそうでもない。何とか彼らのためにも今一度この地札幌で再興・再挑戦させてやりたい。同郷の人々と新しい一村を作りたいという願いである。その思いが故郷へ走らせたのかもしれない。結局、そのことを理解し説得に応じた30名ほどを連れてきた。

結局、一村（上島部落といったような）の夢は果たせなかったが、札幌でそれぞれ散らばった人々がその地で成功を果たしている。

いずれにしろ、上島という人物は、開拓使大書記官調所廣丈が「百芸に通ず」といったというように、短歌、俳句、南画、専門書を著す。何でもござれのスケールの大きな人物であったことは想像に難くない。かつて武士であったことなどおくびにも出さない。町人になったり、行商したり、常に迷わず前向きにして、積極的行動派、何事にも果敢に挑戦（チャレンジ）する。

事に当たって、細心にして探求心もあるとなると、これはもう完璧ビジネスの世界の人間である。上島（正）こそベンチャー・ビジネスを实践した人であったと言えるのではないか。

明治の時代には新しいタイプの人物が、とりわけビジネスの世界では、渋沢栄一、岩崎弥太郎などの名前が出てくるが、上島はそれらに比肩する要素を持ち合わせている。

ともかくにも、混沌とした世界にぱっと飛び出したスケールの大きい一人の新人類であったと同時に、北海道（札幌）におけるビジネス・イノベーションの先駆け人と言えるのではないか。

そうした人物が故郷（信州信濃の上諏訪）へ戻って、自身の成功を伝え北海道移住を勧奨した。それを受けた人々が挙って従った様子が当たり前のように目に浮かぶ。

そして、上島の果敢な精神を受け継いで札幌・厚別の地に入植した連中8名もまた、開拓者というより今日言うところの「企業家（ベンチャー・ビジネスの实践者）」たちであったと考えてもあながち間違いとはいえないであろう。

上島は、大正8年（1919）、82歳で反乱万丈の一生を終えた。

注と参考文献：

- (1) 「札幌の歴史を築いた先人達」(札幌歴史資料館)：

(<http://www.justmystage.com/home/moiwa/sapporo-siryokan/lekishibunko/rekisi/index.htm>)

【挙がっている先人たちの名前】

浅羽靖・戸津高知、安達喜幸、我孫子倫彦、阿部宇之八、荒井金助・早山清太郎、伊藤一隆、伊藤亀太郎、今井藤七、岩村通俊、ウィリアム・クラーク、ウィリアム・ホイラー、上島正、上田万平・善七、宇都宮仙太郎、エドウィン・ダン、大滝甚太郎、大友亀太郎、小田良治、黒田清隆、佐藤考郷、佐藤昌介、サラ・クララ・スミス、重延卯平、島義勇、志村鉄一・吉田茂八、水原寅蔵、助川貞二郎、鈴木豊三郎、高岡直吉・熊雄、対馬嘉三郎、中村信以、新渡戸稲造、橋本正治、

古谷辰四郎，ホーレス・ケブロン，松本十郎，三木勉，宮部金吾，村橋久成・中川清兵衛，山田幸太郎 (以上，46名)

- (2) 「各府県移住民概況 5・長野県」『殖民公報』(北海道庁殖民部殖民課)，北海道協会支部，第 66 号，明治 45 年 (1912) 5 月。(阿部敏夫氏提供)

顕著なる移住者及び企業者 (人：7 名，郡民・農場：5 件)

商業向井嘉兵衛 札幌屈指の商店

商業逸見小右衛門 函館の商店

札幌附近の諏訪郡民 明治十年諏訪郡の民上島正なるもの札幌に移住し開墾に着手す同十四五年の交同郡の民数十戸団結して移住せしか率先者の詐偽に罹り遂に団結を解き各自民札幌附近に於て土地を購ひて土着し又其の内の一部は白石村字厚別に於て未開地を出願し水田を開き此処に新部落を成せり同地に信濃開墾地の名あるは之か為なり，要するに此移住民は着実業に従ひ概ね成功して現今屈指の農家となれり今其主なるものを左に挙げん

上島 正 札幌区に於て著名なる花園業者なり其園を東臯園と称し牡丹，芍薬，花菖蒲，ペコニヤ，萩其他和洋花卉数十種を栽植又種苗を販買賀せり

武井総蔵 札幌村で玉葱栽培。

宮坂坂蔵 札幌区で果樹栽培。

藤森銀蔵 圓山村で農業と園芸，長男：馬牧場，次男：牛牧場を十勝の國で経営。

河西由造 移住の際は資力甚た乏しかりしか白石村字厚別に入り開墾に従事し今や水田 55 町歩畑 25 町歩を有し村内屈指の資産家となれり

- (3) 南画とは，「デジタル大辞泉」の解説によると，i) 南宗画 (なんしゅうが) の略称，ii) 江戸中期以降，南宗画の影響のもとに独自の様式を追求した新興の画派の作品。大成者は池大雅と与謝蕪村，とある。
- (4) 厚別中央歴史の会小冊子編集委員会編 (2010)『厚別中央 — 人と歴史 —』，厚別中央地区まちづくり会議 (事務局 厚別中央まちづくりセンター)。
- (5) 上島正 (1900)『想い出の記』，明治 33 年作成，全 38 頁 (根岸徹校訂)。
校訂者・根岸徹氏は，厚別中央歴史の会会員である。
- (6) 加藤秀俊 (1976)『空間の社会学』，(中公叢書)，中央公論社，p.260。
- (7) 「高嶋城の説明パンフレット」には，以下のような記述がある。

天正 18 年 (590)，当時の諏訪領主諏訪頼忠が徳川家康の関東転封に従って武蔵国へ移った後，豊臣秀吉の武将白省高齢住吉が諏訪に転封，2 万 7 千石を与えられ諏訪の領主となりました。高音は安土城や大阪城の築城にも携わった築城の名手。転封の翌年，天正 19 年 (591) にはすでに城地の見立てと設計を終え，翌文禄元年 (592) に着工，慶長 3 年 (598) まで 7 年ほどかかって高島城を築城。城の際まで諏訪湖の水が迫り，湖上に浮いて見えたことから別名「諏訪の浮城」と呼ばれ，また「諏訪の殿様よい城持ちやるうしろ松山前は海」と歌われた名城です。その後，関ヶ原の戦いで徳川軍に属した諏訪頼水 (頼忠の子) は，慶長 6 年 (1601) 家康の恩恵によって旧領諏訪に帰り藩主となり，以後，10 代藩主忠礼に至る 270 年の間，諏訪氏の居城としてその威容を誇りました。

しかし明治 4 年 (1871)，廃藩置県により封建制のシンボルである城郭の撤去が決定。明治 8 年 (1875) には天守閣の撤去が終了。翌明治 9 年 (1876)，本丸跡が高島公園として一般に開放されました。諏訪住民の高島城に寄せる愛着は強く，昭和 45 年 (1970)，天守閣が復興されました。同時に，冠木門一角櫓なども復興されたほか，当時の石垣の一部も残るなど，今も往時を偲ぶことができます。

- (8) YAHOO! ジオシティーズ：

(http://www.geocities.jp/unlocated_area/chubu/nagano.html#SUWA-TATSUNO)

- (9) 週刊鉄道絶景の旅・編集部編 (2010)『全国鉄道パノラマ地図帳』, 集英社, p.46。
- (10) 諏訪市・諏訪市教育委員会編 (1985)『第 21 回諏訪市文化祭・諏訪藩主展パンフレット』, 昭和 60 年 11 月 1～4 日。(丸山幸重氏 (諏訪市在住) 提供)
- (11) 宮澤悦雄 (2009)『<河合曾良参百回忌・曾良顕彰像建立記念> 曾良物語』, 正願寺 (諏訪市), 小冊子 (全 55 頁)。

上諏訪では、俳人曾良がでている。河合曾良は、慶安 2 年 (1649 年) 酒造業 (屋号銭屋) に生まれる (～宝暦 3 年 (1710 年) 享年 61 歳)。上諏訪では、高島藩 3 代藩主, 4 代藩主の頃に当たっている。一般にも俳諧が相当広まっていたと推察される。

上島が幼少年期, 書画を習ったのもこのあたりに端を発していたのではないかと理解できる。

- (12) 高島学校百年史刊行会編 (1973)『高島学校百年史』, 昭和 48 年 11 月発行 (非売品)。

高島教育百年の歩みの基盤となり得たもの, それは江戸時代における士族教育を司っていた藩校長善館における教育であり, 広く庶民教育を支えていた寺子屋教育であった。

享和三年 (1803) 幕府の文武奨励政策の時流の中で生まれた長善館は, 幕末藩制立て直しの期待のもとで, 藩への御奉公のための造士がねらいであり, 武芸の他は専ら儒学中心であった。又入学の対象となっていたのは中小姓以上の嫡子庶子とされ, ごく限られた特殊階級のためのものであった。とはいえその教育の中心理念となっていた「長善救失」は現代教育に通ずるものをもっていた。又, 整えられた学校体系のもとで初めて「修学ノ方法施設ノ道」を当地方に具現した点で長善館は大きな意味をもつといえよう。

維新期を迎え高島藩も時勢に対処すべく, 皇道を本とする国学校をいち早く生み出し平民の入学を許可した。又, 長善館は廃藩置県と共に高島県学校長善館となり大きく変革して存続の努力を続けたが, 新時代の中でその封建的な体質は如何ともしがたく旧藩県と共に廃校の運命をたどっていった。しかし藩校の教授・学生達は, 新しい時代における小学校の教員あるいは設立世話役となり, 新体制出発の基礎固めに大きな役割をはたすことになった。

他方, 寺子屋は何の強要もない自由意志に基づく私立の教育機関であり, 入門者は身分・格式・性別を問わず全くの自由性普遍性のもとで教育が行なわれていたところに意味がある。上諏訪地区でも十軒以上の塾で五百余名の子ども達が通塾していた。他地区に比して女子の割合が多く士族の師匠の多いのが特色であった。その教育は個別指導による読み書きの実用教育であり, 師弟の間の人間関係の深さは瞠目させられるものがあつた。近代学校発足時において寺子屋師匠達も教員への転身, 学校世話役・学童への入学啓蒙等積極的な働きかけを行なっている。後, 筑摩県の就学率が日本一になった原因の一つとしてこの寺子屋教育の庶民への浸透ぶりは無視できない重みをもっていたといえよう。

明治四年十一月, 旧藩県統合により筑摩県が発足し, 強力な官僚組織のもとづく新しい教育行政の展開が始まった。教育権令として名高い永山盛輝は, 国の文教行政を先取りする鋭く且つ大胆な教育施策により, 「学制」頒布以前に「学校創立告諭書」を布達し各地に百校に及ぶ郷学校を設立した。

かくて, 高島学校の前身となる大和村第十五小校, 高島町第七十一小校が次々と誕生し, 「学制」による教育発足のための礎石を作ることになるのである。

- (13) 杉浦幹雄「信州諏訪の生糸世界一の分布」: (<http://www.tranzas.ne.jp/~smikio/suwa.html>)

8 全国一の寺子屋

中世のころ兵農分離で領主の命令は口頭から文または文書による伝達に切り替わりつつあつた。年貢・触書・証文などが増加したこともある。農民・庶民で親が教育したいもの, 勉強がよくできるものは僧侶にするのが目的ではなくても寺子としてお寺に預けて教育を頼むようになった。これが寺子屋の始まりである。

信州は、東は甲府・江戸、北は金沢、西は京都、南は尾張・三河と交通の要衝にあり、善光寺・諏訪大社信仰のほかにも戸隠・御岳などの山岳信仰の土地であった。江戸時代信州は小藩分立で藩主交代が激しかったが、諏訪の高島藩3万石は譜代として移封もなく幕末には老中職を務めたこともあり、藩の統治は安定していた。

寺子屋は8代将軍吉宗の時代幕府・藩が教育を奨励したこともあり急速に普及した。信州の寺子屋は古くは16世紀から始まり17世紀から増え始め19世紀になって急増した。寺子屋の師匠は農民が56%、僧侶16%、武士は10%、神官・修験者は8%であった。全国に比べると農民の師匠が多いのが目につく、農民の自立が早かったこともあるのだろう。

諏訪郡では17世紀に始まり19世紀急増した。師匠は農民47%、武士・浪人が27%、僧侶9%、神官・修験者5%。他藩に比較すると武士のウエイトが高いが、これは高島藩の地侍が多く教育レベルが高かったこともある。農民師匠は他藩よりウエイトが低いのが約半数は農民であり特に幕末期急増している。石高あたり師匠数では高島藩（諏訪）が193人とダントツの多さ、松本藩124人、高遠藩（伊那）120人を5割上回る。町中では通年の開業だが、農村では農繁期の春・秋は休業するところが多かった。

幕末、維新の廃藩置県、廃仏毀釈の激動期を農民師匠が多かったことが幸いして寺子屋の閉講も少なく明治の学制改革を迎えて小学校に切り替わり、小学校の就学率明治中期男子全国一になった。
(14) 小平邦彦 (2002)『ボクは算数しか出来なかった』, 岩波現代文庫。

明治元年に十一歳であった祖父は、子供の頃寺子屋にでも通って白文の素読で漢文を学んだのであろう。白文というのは訓点をほどこしてない漢文のことで、素読は意味を説明しないで音読させることをいう。「読書百遍意自ずから通ず」で、素読を繰り返していると意味は自然に分かったものらしい。

後に私が中学の三年になった年の夏休みに、漢文がわからなくて困っていると、祖父が教えてやろうという。これは有難いと思って教科書をもっていくと、祖父はそれを眺めて「へー、こんなものが読めんかねー」というだけで、遂に一言も文章の意味を説明してくれなかった。白文の素読で漢文を学んだ祖父は、教えるというのがその意味を説明することだということに思いが至らなかったであろう。

祖父は毎日朝六時に起きて風呂に入り、そこで一時間体操をする。夕食は散歩に出て上諏訪町の端から端まで四キロ歩く。雨が降った日には町へ出る代わりに家の縁側を繰り返し往復して四キロ歩く、という規則正しい生活をしていた。漢学に通暁し中国の歴史に詳しく祖父は、私を膝にのせて中国の歴史についていろいろ話してくれた。私はそれをお伽噺のように聴いていた。

(15) 石田梅岩 (1739 年)『都鄙問答』(足立栗園校訂 (1999), 岩波文庫), pp.26-27。

商人（あきびと）の道を問の段

或商人問 曰、賣買は常に我身の所作としながら、商人の道にかなふ所の意味何とも心得がたし。如何なる所を主として、賣買渡世を致し然べく候や

答 商人の其始を云ば古は、其餘りあるものを以てその不足ものに易て、互に通用するを以て本するとかや。商人は勘定委しくして、今日の渡世を致す者なれば、一錢輕しと云べきに非ず。是を重て富をなすは商人の道なり。富の主は天下の人々なり。主の心も我が心と引きゆへに我一錢を惜む心を推て、賣物に念を入れ少しもそ僣相（そそう）にせずして賣渡さば、買人の心も初は金銀惜しと思へども、代物の能を以て、その惜む心自ら止むべし。惜む心を止善に化するの外あらんや。

且（そのうえ）天下の財寶を通用して、萬民の心をやすむるなれば、天地四時流行し、萬物育はる々と同く相合ん。如此して富山の如くに至るとも、欲心とはいふべからず。欲心なくして一錢の費（ついへ）を惜み、青戸左衛門が五拾錢を散して、十錢を天下の為に惜まれし心を味ふべし。

如此ならば天下公の儉約にもかなひ、天命に合ふて福（さいわい）を得べし。福を得て萬民の心

を安んずるなれば、天下の百姓（おほんたから）といふものにて、常に天下大平を祈るに同じ。

且御法を守り我身を敬（つつしむ）むべし。商人といふとも聖人の道を不知は、同金銀を設けながら不義の金銀を設け、子孫の絶ゆる理に至るべし。實に子孫を愛せば、道を學て榮えることを致すべし

- (16) 新渡戸稲造（1899）『武士道』（Bushido, the Soul of Japan.）
- (17) 遠山茂樹（2009）『明治維新』，岩波現代文庫，p.311。
- (18) 江戸の藩の石高ランキング：（<http://homepage1.nifty.com/kitabatake/rekishi3.html>）
- (19) 遠山茂樹（2009）『同上書』，年表。
- (20) 鍋木清方（2009）『随筆集・明治の東京』，岩波文庫，（「兎と万年青」pp.49-53）。（「兎後談」，pp.54-59）。
- 万年青（おもと）：ユリ科の多年草，色が変化する。観賞用として品数が多い。
- (21) 友部謙一・西坂靖（2009）「労働の管理と勤労観——農家と商家——」『経営史・江戸の経験 1600～1882』（宮本又郎・粕谷誠編），第3章所収，pp.112-133。
- (22) 「新しい歴史教科書」：（<http://www4.plala.or.jp/kawa-k/kyoukasyo/3-23.htm>）
- (23) 東海道 53 次距離表：（<http://350ml.net/labo/tokaido.html>）
- (24) 遠山茂樹（2009）『同上書』，p.228。
- 地租改正の重要性について詳細に述べている。
- (25) 坪内逍遙（2008）『当世書生気質』，岩波文庫。
- (26) 石狩平野の米作り（玉川学園）：
（<http://www.tamagawa.ac.jp/SISETU/kyouken/rice/ishikari/index.html>）
- (27) 山下昌也（2009）『北海道の商人大名』，グラフ社。
- (28) 西田秀子（2006）「屯田兵の稲作願望——“水田同志名簿”（明治 20 年）顛末——」『札幌の歴史』，札幌市教育委員会文化資料室，第 51 号，pp.13-26。
- (29) 中山久蔵：（https://www.sapporo-u.ac.jp/univ_guide/president/message_h20en.html）
- (30) 上島 正（1900）（根岸 徹校訂）『前出』。

（日記の日付け，明治三十三年十月二十三日，）

繁松は大変腹を立てた様で，まだ，札幌の様子も分らぬ癖に山師めいた事を企てるから困る。当地にて，佐様な術を使用するくらいで米が出来たら，それ以上結構なことはないが，無益だから止して仕舞へ，とのことに，私は押し返して当地の水田は向水もあびる田なれば米作に適せず，私の見込み通りにすればきっと稲が出来ます，と云うに，繁松はますます立腹して，官にて専門の役人をつけて年々試作をやっているが，それでも米らしきものはとれない。以後佐様な事を聞く耳は持たぬから早く立去れよ，と大音に叱りました。然らば自費で試作をやってみますから苗の御分与が願いたい，と申しますと今度は烈火の如く怒って山師と話は致さぬ。早く立去れ立去れ，今後この所に足を踏み込むことは相成らぬ，と畳を蹴立てて内に入りました。で，何とかして水田がやって見たいと，今度は高橋亀次郎氏に相談致しました所，繁松の様ではなく少しは話が面白い。

（明治三十三年十月二十四日）

高橋氏は繁松と違って大いに話の調子が合う。自分が稲田試作の事を話しますと，私も月寒にある所有地に稲の試作が見たいと思っている所ですから，これから一緒に行って見ますかと云うに，左様ならばというので只今兵營のある所より南にあたる水田地に來り自ら鋤を執った。とにかく水田試作の目的だけは達しました。尚この外に札幌村に一ヶ所試みました。これは当時の戸長，稲葉元助氏の所有地を借りた訳です。さて，いよいよ秋になりまして，両所共に稲は無類の上出来，まるで鬼の首でも斬った様な心地が致しました。

併し，ここに一つ面白い話があります。札幌村の水田と勤業課試作場の水田とは隣りあっており

ましたが、こちらの上出来なるにも拘わらず、あちらの方は只青々として更に実を結ぶ様な色も見えないです。所で官員さんや米作りに心ある人々が我れおくれじと見物に来ては、いずれも舌を巻いて感心し、何とこの稲をそのままに持出して繁松にも見せてやってはどうか、と勧めるような人もありましたが、そうしては繁松が不首尾になるであろうとそのまま黙っておりましたが、水田は適当する稲の試作は好結果であったそうなのということが甲より乙に伝って大評判となりました。これかあらぬか繁松は幾程もなく根室の方へ転任になりました。

さて、こうなりますと今迄水田は見込なしとて断念して居た人々もいよいよ水田に心を注ぐ様になったのです。所で高橋亀次郎氏の如きは僅か三年間で数十俵の米を収穫するようになりました。自分は右の水田試作とか地理・地景の踏査と云うような事の外には何にも用事がなかったものですから一日地理課の方へ出頭して測量官の件を願い出しました所、当時の課長山田氏も早速承諾して呉れました。

尚舟越氏も引受けて呉れましたので、ここで暫時、地理課に勤むることとなりましたが、或時山田課長が申しますには、お前には何か職業はないかとのことにハイ色々あります、その中で庭作りが好きですと答えました所、それなればと山田氏の世話で滄海楼(?)の庭を作ったのが始まりで、水原寅蔵氏の庭も造ると云うような次第、その他庭樹を植えることもやりましたが彼是する中その年も十二月となりました。で、ひと先ず帰国し財産を悉く皆売払いして東京より随行の一家族と共に小樽へ着きましたのは翌年(明治11年)六月三日でしたがその時の嬉しさと云うものは今も忘れる事が出来ません。これから前年願ってあった只今の所へ小屋掛をして開墾に取りかかりましたが今でこそこの様に花も咲けば人も観に来て呉れるようなもの、その当時と云うものは実に実にお話になるもなったものではありません。

この辺一面に年数の別からぬ大木の茂り合って居るし、小笹は小笹で思うままに茂っている、お負けに熊めがノコノコやって来ると云う次第で余り心地の良い訳でもありません。

先ず、その年に一反半許り開墾致しまして、これに薑と田芋を作りましたが、何ということですが、これ丈で三百円あげましたよ。二年度には六反開いて三百円余取りあげました。三年目には一町五反開きましたが同じくその年も三百円余手に入りました。ここの三年目には藤森銀蔵、同万吉氏、上島助氏の三戸来しました。

【校訂者注】：薑(きょう)(生姜のこと)、田芋(里芋の一種)

【筆者注】三百円(現在の貨幣価値換算で約300万円)

- (31) 若林 功(1938)「農村史・創業の人びとを語る——厚別開拓の父 河西由造——」(故河西由造小傳)『北海道農會報』, 第38巻, 第453号。

(中島九郎編「河西由造頌徳碑建設に当たって」に収録)。

冒頭の「厚別開拓の父河西由造」の一文は北海道農會幹事若林功氏の執筆にかかり、北海道農會報第38巻第453号(昭和13年9月発行)に登載されたのを、特に同氏の御許を得て転録したものである。(中島生)

(中島九郎は、北海道帝國大學教授正四位勳二等、河西由造の甥に当たる人)

(若林 功は、北海道農會幹事とある)

- (32) 帝国書院編集部編(2006)『旅に出たくなる地図 日本』, (株)帝国書院, p.75。

- (33) 札幌の神社・諏訪神社: <http://moiwa.cocolog-nifty.com/blog/2007/07/45-77c5.html>

上島 正と諏訪神社:

(<http://www.justmystage.com/home/moiwa/sapporo-siryokan/lekishibunko/rekisi/011.html>)

- (34) 上島 正(1900)(根岸 徹校訂)『前出』。

* 人為交接について

アノ菖蒲の御尋ねですか。アレハ移住の時、東京表で有明なる武蔵屋瀧蔵氏より花菖蒲七拾種を賄い取り、明治十三年に人為的交接を行い、この法で殖やして、五、六百種までにいたし、西洋花菖蒲も矢張り同上の手続きで殖やしましたが、只今貴方が御覧なさるゝ通りです。其の他の植物も、留意、苦心して人為交接を行い随分上種を出しましたが、これらの事が何時しか日本園藝会の知る所となり、明治二十六年十二月二十四付で、日本園藝会々長、花房義賢氏の名前で「本会学藝委員を囑托す」という辞令が参りました。是れは私し身に取りましては、過分の面目と言わなければなりません。

.....

人為交換（接）法に就いては、明治二十五年八月、北海道物産共進会がありました。西洋花菖蒲、洋名ではグラジロースとやら言うのを出品いたしました。其の時、褒状を賜りました。其の書付けはこれで御座ります。（其の文に曰）

西洋花菖蒲 上島 正
人為交換法に通行しこれを実地に応用
良種を産す其巧妙見るに足る

* 切り花の水揚げについて

いやもう、これは鼻を高くして自慢するに足る訳にはありませんが、ほかに鳥取（チョット）聴いて頂きたいことがあるのです。それを「切花の水あげ」の事です。ご案内の通り、手前花園にも花は随分数々ござりますが、其の中で切花として水あげに最も苦心致しましたのは萩です。これは誰しも知っている通り、切花としては瓶の中でまことに保たないものですが、私は是程のことが工夫が出来なくてとは、壮季の頃、諸国を遍歴しました時分に、或る活山師、或る花屋、さる花園などもそれぞれ蒼蠅（うるさ）がらるるまで見て見ました。聴いても見ましたが誰一人として教えて呉れる人もありません。其所で私は何とかしてと思ひまして、活花に用いる葉を萩だけでも何十種も揃えて見ましたが、埃だけでも（ちっとも）効能がないから、所詮、萩の切り花に水を揚げることは無益じゃと断念しておりました。

所が、或日の夕方、子供らが今を盛りの萩を惜気分もなく切り採って持ち帰りましたので「痛はしきに」と、かう思ひましてから、早朝に切ったものさえ無益だから今頃切ては尚しも益に立つ筈もないとは考えましたけれども、あまり見事なのに免じて、花瓶の温水の中へ投げ込み置きました。

スルト翌の朝になりまして、件の萩の花が前夜とすこしも色が変わっていない。さては…と考えまして、其の日の夕方、またも花を切つて来りまして、今度は一旦熱き湯に投じ、其の後水を注し、かふやって翌の朝見ました所、まことに青々として、花も色も前夜と少しも変わっておりません。コイツしめタトサア大喜び。これがすなわち「萩の花の水揚げ発明」の初めてでござりました。

また、天竺牡丹、洋名でダリーヤとか申すそうですがコイツ水揚げが六づかしひ。切り取るや花も葉も直ぐに萎れる。誠に手置きの厄介な花で、切るとき湯に入れ花箱（活花師の用ゆる水揚げ箱）に入れて置いても二時間とは持たないものですが、この発明の実る偶然でござりました。

或る時天竺牡丹を切り、熱き湯に入れ、これを花箱に移つさうとした所へ、客来あつてしきりに私を呼ぶものですから其の俣にして出迎ひしまして、大方二十分も経ちましたと思う時分に、天竺牡丹のことを思いだして、これ々々だから少々御免と急ぎ足に一室へ来てみました所、妙ではありませんか。まるで活き々々として圃にあるのと少しも変わりがない。これも大喜びで、以来天竺牡丹を切りますとすぐ熱湯に投れ、空気の流通のよき所へ置きまして見ますと、生々と水が揚がり、随分一週間位わ、いきいきとして花も発（さ）きます。これがまづ「天竺牡丹水揚

げ」のそもそもでした。これらは大形に御吹聴申す訳ではありませんが、発明なんちうものわ、大程、態事（根岸注：故意に身構えること）でなく不圈（ふと）したことから出来るものです。

- (35) 米倉勝美著（2004）『おやじの背中・我が家百年の歩み』，旭図書出版社（中澤豊氏提供）。
- (36) 小池睦郎(1984)「上島正と渡道の動機」『川下百年誌』(川下開基百年記念実行委員会編)，pp.25-38。
- (37) 辻 達也（1993）『大岡越前守——名奉行の虚像と実像——』，中公新書，pp.156-163。
- (38) 田島義博（1990）『商の春秋』，日本経済新聞社，pp.47-49。